

# 香川県埋蔵文化財センター年報

平成 27 年度

2017. 2

香川県埋蔵文化財センター

## はじめに

香川県埋蔵文化財センターは、埋蔵文化財の調査及び研究を行うとともに、その保存と活用を図り、県民の文化的向上に資するため、昭和62年11月1日に設置されました。

平成27年度は県立学校再編整備事業、国道11号大内白鳥バイパス建設、病院施設改修、国道438号道路改築、県道改築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査及び過年度発掘の整理、報告書刊行をはじめ、出土品の保管・整理、普及啓発、讃岐国府跡探索事業などを実施し、これらの調査によって得られた多くの成果等をもとに、展示や、広報誌の刊行、学校での出前授業や考古学体験講座を行い、埋蔵文化財の保護意識の普及・啓発に努めました。

本書は、これらの平成27年度に実施した事業の内容をまとめたものです。本書が地域の歴史や文化への理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、ご指導、ご協力をいただいた関係各位にお礼を申し上げますとともに、今後とも当センターの活動に皆様の一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成29年2月

香川県埋蔵文化財センター  
所長 増田 宏

# 目次

## はじめに

I 組織・施設	1
1. 香川県埋蔵文化財センターの組織	1
2. 施設の概要	2
3. 決算の状況	3
II 事業概要	4
1. 埋蔵文化財調査事業	4
内間遺跡	6
旧練兵場遺跡	10
六条下所遺跡	11
太田原高州遺跡	13
中又北遺跡	16
岸の上遺跡	20
蒲生遺跡	24
2. 普及・啓発事業	28
(1) 展示	28
(2) 現地説明会・地元説明会	29
(3) 講師の派遣	29
(4) 夏休みこどもミュージアム	30
(5) 発掘体験講座	30
(6) 考古学講座	30
(7) 文化ボランティア活動	30
(8) 新聞記事掲載	30
(9) 資料の貸出・利用	31
(10) 職場体験学習・インターンシップ	31
(11) 刊行物	31
(12) ホームページ	31
3. 讃岐国府跡探索事業	32
III 讃岐国府跡第33次調査成果の概要	34
IV 調査研究 四国における前半期古墳出土埴輪の基礎的研究 - 香川県今岡古墳出土埴輪を中心として -	42

# 挿 図 目 次

第1図 発掘調査遺跡位置図…………… 5	第20図 33-1区遺構平面図…………… 39
内間遺跡	第21図 33-2区遺構平面図…………… 40
第2図 遺跡位置図 (1/25,000) …… 6	四国における前半期古墳出土埴輪の
第3図 遺構平面図…………… 9	基礎的研究
旧練兵場遺跡	第22図 古墳分布図…………… 42
第4図 遺跡位置図 (1/25,000) …… 10	第23図 今岡古墳出土土器・円筒埴輪1
六条下所遺跡	…………… 43
第5図 遺跡位置図 (1/25,000) …… 11	第24図 今岡古墳出土円筒埴輪2… 44
第6図 遺構平面図 (1/4,000) …… 12	第25図 今岡古墳出土円筒埴輪3… 45
太田原高州遺跡	第26図 今岡古墳出土円筒埴輪4… 46
第7図 遺跡位置図 (1/25,000) …… 13	第27図 今岡古墳出土円筒埴輪5… 47
第8図 遺構平面図 (1/100) …… 15	第28図 今岡古墳出土円筒埴輪6… 48
中又北遺跡	第29図 今岡古墳出土円筒埴輪7… 49
第9図 遺跡位置図 (1/25,000) …… 16	第30図 今岡古墳出土円筒埴輪8… 50
第10図 遺構平面図…………… 19	第31図 今岡古墳出土朝顔形埴輪… 51
岸の上遺跡	第32図 今岡古墳出土盾形埴輪1… 52
第11図 遺跡位置図 (1/25,000) …… 20	第33図 今岡古墳出土盾形埴輪2… 53
第12図 第1面 遺構平面図…………… 22	第34図 今岡古墳出土蓋形埴輪1… 54
第13図 第2面 遺構平面図…………… 22	第35図 今岡古墳出土蓋形埴輪2… 55
第14図 第3面 遺構平面図…………… 23	第36図 今岡古墳出土蓋形埴輪3・
蒲生遺跡	甲冑形埴輪…………… 56
第15図 遺跡位置図 (1/25,000) …… 24	第37図 今岡古墳出土家形埴輪1… 57
第16図 遺構平面図 (1/400) …… 27	第38図 今岡古墳出土家形埴輪2・
讃岐国府跡第33次調査成果の概要	半裁器台形埴輪・鳥形埴輪・
第17図 讃岐国府跡における既往の	不明形象埴輪…………… 58
調査地と地形…………… 36	第39図 出土地不明の
第18図 遺構配置	円筒埴輪・朝顔形埴輪… 59
(飛鳥時代末葉～奈良時代初頭) …… 37	
第19図 遺構配置	
(奈良時代～平安時代) …… 38	

※遺跡位置図は国土地理院地形図 (1/25,000) に遺跡位置を追記して掲載した

# 写真目次

## 内間遺跡

- 写真1 6区土坑出土弥生土器……7  
 写真2 SD096と掘立柱建物……7  
 写真3 SD096 しがらみ……7  
 写真4 出水 (SD084)……7  
 写真5 池状遺構……8

## 旧練兵場遺跡

- 写真6 7区流路① (西から)……10  
 写真7 7区流路② (西から)……10

## 六条下所遺跡

- 写真8 1区江戸時代の掘立柱建物跡  
 (東から)……11  
 写真9 3区全景 (南から)……11

## 太田原高州遺跡

- 写真10 SK801 全景 (南より)……13  
 写真11 楕円形のまとまり検出状況  
 (北より)……14  
 写真12 楕円形のまとまり拡大 (北より)  
 ……14  
 写真13 楕円形のまとまり重複状況  
 (北西より)……15  
 写真14 炭化米拡大 (南西より) ……15

## 中又北遺跡

- 写真15 調査区全景と灌漑水路……16

## 写真16 SD1002上層

弥生土器出土状況……17

## 写真17 SD1002断面……17

## 写真18 SB1002……17

## 写真19 SB1001……18

## 写真20 SB1001 柱穴黒色土器出土状況 ……18

## 岸の上遺跡

## 写真21 5区第1面……20

## 写真22 6区 古代大溝 (SD4028) 断面……21

## 写真23 6区 古代大溝 (SD4028) 出土木製品……21

## 写真24 5区2面 水田畦畔……21

## 写真25 6区3面掘立柱建物……21

## 蒲生遺跡

## 写真26 第1面北端鹹水槽群……24

## 写真27 鹹水槽 SX1010 完掘……24

## 写真28 I区第2面全景……25

## 讃岐国府跡

## 写真29 大型建物1～3 西から…41

# 目 次

I 組織・施設	第15表 講演等への講師派遣一覧 ..... 29・30
1. 香川県埋蔵文化財センターの組織	(4) 夏休みこどもミュージアム
第1表 職員一覧..... 1・2	第16表 夏休みこどもミュージアム 実施事業一覧..... 30
3. 決算の状況	(5) 考古学講座
第2表 発掘調査決算..... 3	第17表 考古学講座一覧..... 30
第3表 整理・報告決算..... 3	(8) 資料の貸出・利用
第4表 管理運営費等決算..... 3	第18表 資料貸出・利用一覧..... 31
II 事業概要	(9) 職場体験学習・インターンシップ
1. 埋蔵文化財調査事業	第19表 職場体験学習・インターン シップ一覧..... 31
第5表 発掘調査遺跡一覧..... 4	IV 調査研究
第6表 遺跡の概要一覧..... 4	第20表 土器・壺形埴輪観察表..... 68
第7表 整理・報告遺跡一覧..... 5	第21表 円筒埴輪観察表1..... 68
第8表 刊行報告書一覧..... 5	第22表 円筒埴輪観察表2..... 69
2. 普及・啓発事業	第23表 円筒埴輪観察表3..... 70
(1) 展示	第24表 円筒埴輪観察表4..... 71
第9表 展示一覧..... 28	第25表 円筒埴輪観察表5・朝顔形 埴輪観察表1..... 72
第10表 入館者数一覧..... 28	第26表 円筒埴輪観察表6・朝顔形 埴輪観察表2..... 73
第11表 センター外展示一覧 ..... 28・29	第27表 形象埴輪観察表1..... 73
第12表 現地説明会・地元説明会一覧 ..... 29	第28表 形象埴輪観察表2..... 74
(3) 講師の派遣	第29表 形象埴輪観察表3..... 75
第13表 体験講座への講師派遣一覧 ..... 29	
第14表 学校への講師派遣一覧..... 29	

(注)

1 本書で用いる座標系は世界測地系（国土座標第Ⅳ系）である。

2 遺構は次の略号により表示した。

SH	竪穴建物	SB	掘立柱建物	SP	柱穴・小穴	SK	土坑	SD	溝
SR	自然河川	SX	性格不明遺構						

## I 組織・施設

## 1. 香川県埋蔵文化財センターの組織

## (1) 組織



## (2) 職員

所属	職名	氏名
所	長	真鍋 昌宏
次	長	前田 和也
総務課	課長(兼務)	前田 和也
	主任	寺岡 仁美
	主任	高木 秀哉
	主任	中川 美江
	主任	丸尾 麻知子
	主任	岩崎 昌平
調査課	課長	森 格也
	主任文化財専門員	森下 英治
	主任文化財専門員	佐藤 竜馬
	主任文化財専門員	信里 芳紀
	主任文化財専門員	松本 和彦
	技師	真鍋 貴匡
	技師	竹内 裕貴
	主任	西谷 敬司
	嘱託	藤井 菜穂子
	嘱託	今井 由佳
	嘱託	井上 加奈子
	嘱託	名倉 美保
	嘱託	徳永 貴美
	嘱託	脇 恵



資料普及課	課長(兼務)	森 格 也
	主任文化財専門員	西 村 尋 文
	主任文化財専門員	蔵 本 晋 司
	文化財専門員	森 下 友 子
	文化財専門員	小 野 秀 幸
	嘱託	中 野 優 美
	嘱託	佐々木 博子
	嘱託	加藤 恵子
	嘱託	香西 栄理
	嘱託	西山 佳代子
	嘱託	市川 孝子
	嘱託	山地 真理子
	嘱託	猪木原 美恵子
	嘱託	葛 西 薫
	嘱託	高橋 千恵
	嘱託	甲斐 美智子
	嘱託	牧野 香織
	嘱託	土居 乃里子
	嘱託	森 后 代
	嘱託	大林 真沙代
	嘱託	原 節 子
	嘱託	合田 和子
	嘱託	西本 智子
嘱託	竹村 恵子	
嘱託	田中 沙千子	
嘱託	川井 佐織	
嘱託	森 國 愛子	
嘱託	正本 由希子	
嘱託	岡本 光代	
嘱託	青屋 真理	
嘱託	伊藤 真紀	
嘱託	竹内 悦子	
宮城県山元町教育委員会派遣	主任文化財専門員	木下 晴一

第1表 職員一覧

## 2. 施設の概要

- (1)所在地 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4  
 (2)敷地面積 11,049.23㎡

## (3) 建物構造・延床面積

①本館	鉄筋コンクリート造・2階建 (一部鉄骨造・平屋建)	1,362.23㎡
②分館	鉄骨造・2階建	337.35㎡
③第1収蔵庫	鉄骨造・2階建	1,525.32㎡
④第2収蔵庫	鉄骨造・3階建	2,040.33㎡
⑤車庫	鉄骨造・平屋建	29.97㎡
⑥自転車置場	鉄骨造・平屋建	25.00㎡

## 3. 決算の状況

(単位：千円)

原因者	遺跡名	決算
国土交通省	内間遺跡	70,645
道路課	太田原高州遺跡	1,079
	六条下所遺跡	22,124
	中又北遺跡	9,700
	岸の上遺跡	20,851
高校教育課	蒲生遺跡	26,367

なお、四国こどもとおとなの医療センターを原因者とする旧練兵場遺跡の発掘調査経費は、整理費に含まれている。

第2表 発掘調査決算

(単位：千円)

原因者	遺跡名	決算
国土交通省	警水中筋遺跡	9,349
	田中遺跡	5,801
	仲戸遺跡・仲戸東遺跡	2,186
四国こどもとおとなの医療センター	旧練兵場遺跡	27,703
土木監理課	多肥松林遺跡	8,337
道路課	太田原高州遺跡	6,268
	須田・中尾瀬遺跡	5,458
	住屋遺跡	5,762
	旧練兵場遺跡	1,655
	北岸南遺跡	5,723
	十川東・平田遺跡	696
	東坂元北岡遺跡・飯山北土居遺跡	543
水道局	丸山窯跡	4,869
保健体育課	平池南遺跡	18,386

第3表 整理・報告決算

(単位：千円)

事業名	決算	
管理運営費等	管理運営費	4,538
	職員給与費	146,468
	讃岐国府跡探索事業	10,223
合計	161,229	

第4表 管理運営費等決算

## Ⅱ 事業概要

### 1. 埋蔵文化財調査事業

調査課は、2班体制で国道バイパス建設、病院施設改修、県道整備、県所管国道整備、県立高校整備に伴う7遺跡の発掘調査を行うとともに、讃岐国府跡探索事業に係る発掘調査を1班が担当した。資料普及課は、4班体制で国道バイパス建設、病院統合、県土木事務所建設、県道整備、県所管国道整備、水道局投棄場整備、陸上競技場整備に伴う16遺跡の整理及び8冊の報告書の刊行を行った。

原因者	事業名	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	調査期間
国土交通省	国道11号大内白鳥バイパス建設	内間遺跡	東かがわ市町田	5,173	7月～1月
四国こどもとおとなの医療センター	病院施設改修	旧練兵場遺跡	普通寺市仙遊町	52	8月
道路課	太田上町志度線	六条下所遺跡	高松市六条町	1,934	11月～3月
		太田原高州遺跡	高松市太田上町	113	6月
	多度津丸亀線	中又北遺跡	仲多度郡多度津町	757	2月～3月
	国道438号	岸の上遺跡	丸亀市飯山町	1,629	4月～6月
高校教育課	小豆地区県立学校再編整備	蒲生遺跡	小豆郡小豆島町	794	4月～7月
合 計				10,452	

第5表 発掘調査遺跡一覧

遺跡名	遺跡の概要	主な遺構・遺物
内間遺跡	弥生時代～中世の集落跡	弥生時代の溝状遺構 古代の掘立柱建物跡、溝状遺構 中世の溝状遺構、出水、井戸 弥生土器、須恵器、土師器、曲物
旧練兵場遺跡	弥生時代～古代の集落跡 弥生時代と古代の河川跡	弥生時代と古代の河川跡 弥生土器、須恵器、土師器
六条下所遺跡	縄文時代～近世の灌漑水路群 近世の集落跡	縄文時代の溝状遺構 古代の溝状遺構 近世の掘立柱建物跡 縄文土器、弥生土器、土師器、石器
太田原高州遺跡	弥生時代～古墳時代の集落跡	弥生時代の竪穴建物跡 弥生時代の土坑 古墳時代の竪穴建物跡 弥生土器、須恵器、土師器、炭化米
中又北遺跡	弥生時代～中世の集落跡	弥生時代の溝状遺構 古代の掘立柱建物跡 弥生土器、須恵器、土師器
岸の上遺跡	古墳時代の集落跡 古代の生産遺構	古墳時代の掘立柱建物跡 古代の水田跡、溝状遺構 須恵器、土師器、甕
蒲生遺跡	近世の製塩跡 弥生時代～中世の集落跡	近世の鹹水槽 中世の掘立柱建物跡 弥生時代の土坑 弥生土器、須恵器、土師器、製塩土器、瓦器、陶磁器、土鏃、鉄釘

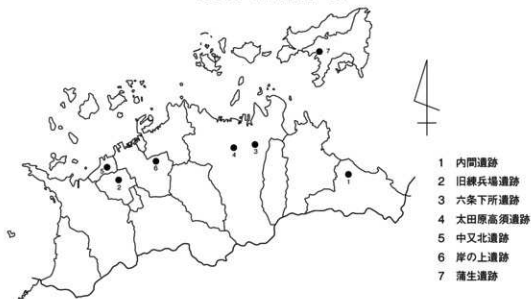
第6表 遺跡の概要一覧

原因者	遺跡名	所在地	整理期間
国土交通省	管水中筋遺跡	東かがわ市中筋	7月～10月
	田中遺跡	東かがわ市白鳥	11月～1月
	仲戸遺跡・仲戸東遺跡	東かがわ市川東	平成26年度
四国こどもとおとなの医療センター	旧練兵場遺跡	普通寺市仙遊町	4月～8月
土木監理課	多肥松林遺跡	高松市多肥上町	4月～8月
道路課	太田原高州遺跡	高松市太田上町	10月～12月
	須田・中尾瀬遺跡	三豊市詫間町	2月～3月
	住屋遺跡	東かがわ市川東	1月～3月
	旧練兵場遺跡	普通寺市仙遊町	9月
	北岸南遺跡	丸亀市飯山町	4月～6月
	十川東・平田遺跡	高松市十川東町	平成26年度
	東坂元北岡遺跡	丸亀市飯山町	平成26年度
	飯山北土居遺跡	丸亀市飯山町	平成26年度
水道局	丸山窯跡	綾歌郡綾川町	9月～10月
保健体育課	平池南遺跡	丸亀市金倉町	9月～3月

第7表 整理・報告遺跡一覧

書名
国道11号大内白鳥バイパス改築事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 仲戸遺跡・仲戸東遺跡
独立行政法人国立病院機構普通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 旧練兵場遺跡Ⅴ
独立行政法人国立病院機構普通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第7冊 旧練兵場遺跡Ⅵ
高松土木事務所新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥松林遺跡
県道普通寺詫間線道路改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 旧練兵場遺跡
県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 十川東・平田遺跡
国道438号改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 東坂元北岡遺跡・飯山北土居遺跡
水道局第3投棄場整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 丸山窯跡
讃岐国府跡1

第8表 刊行報告書一覧



第1図 発掘調査遺跡位置図

## うちまいせき 内間遺跡

内間遺跡は、国道11号大内白鳥バイパスの建設に伴い、平成27年7月～平成28年1月にかけて調査を行った東かがわ市町田に所在する遺跡である。平成26年度の調査区の西側の部分の5,173㎡を対象とし、3区から11区まで調査区を設定し調査を行った。

遺跡は、大内平野の南西部に位置し、那智山から北へ延びる丘陵の縁辺部に立地する。内間遺跡の周辺には、道路状遺構や多数の建物が検出された坪井遺跡、8世紀の獨立柱建物や刻書土師器が出土した王子の谷遺跡がある。

遺構面は、近代以降の耕作地としての利用によって、削平を受けている部分が多く、複数の遺構面を確認できる部分もあったが、おおむね遺構面は1面である。弥生時代～近世までの遺構を検出し、それらの遺構面の下層からは縄文時代晩期の遺物が出土した地点もある。

耕作土の下は、近世の遺物を含む包含層が確認できる。さらに下層には、南側の丘陵に由来する粗砂を含む堆積層が確認でき、3・4区など丘陵の中の谷筋に位置している地点では、中世以降の遺構が形成される面と、さらに下位に弥生時代後期～古代にかけての遺構面が確認できる。

調査の成果として、遺跡周辺の土地利用の形態と、それに伴う開発行為の変遷が、一つの遺跡内で確認できたことがあげられる。



第2図 遺跡位置図 (1/25,000)

(国土地理院1/25,000地形図「三本松」の一部を加工して利用)

### 縄文時代

発掘調査で確認できた最古の段階では、遺跡周辺は現在よりさらに起伏の大きな地点であった。3区では、遺構面の形成土のうち、丘陵由来の粗砂を多く含む層が谷状地形に合わせて落ち込んでおり、それらを部分的に掘削すると、自然木や縄文時代晩期の土器が見つかった。ただし遺物量は僅少であり、現在よりも起伏の大きいこの地の利用は想定しがたい。

### 弥生時代

弥生時代については、丘陵の縁辺部に遺構がみられ、そのほかの地点では散見される程度である。6区で確認されている土坑は、長軸約1m程であるが、完形の土器を多く含む。6区では、後世の遺構の埋土中にも弥生土器がみられる。6区は、10区で確認できる流路の延長があり、そこか

ら多量に弥生土器が出土していることから、流路からの混入遺物は多いと考えられる。また、9区では2基の土器棺が検出され、丘陵の縁辺部を利用した墓城の形成がなされていたものと考えられるが、その規模や範囲は不明である。



写真1 6区土坑出土弥生土器



写真2 SD096と掘立柱建物

## 古代

弥生時代の後、次に遺構が認められるのは、飛鳥時代（7世紀末）である。この時期の遺構としては、平成26年度調査区も合わせ、総延長220mを測る灌漑用水路と、それに近接する掘立柱建物が4棟ある。灌漑用水路については、最大幅7.5m、深さ2mを測り、堆積状況から、埋土は機能時と水路廃絶後の段階に分別できる。水路の中でも、旧地形の傾斜が急な地点については、平面形態が蛇行する傾向がある。このほか、埋土の最下層である砂質土の堆積が厚いことから、この地点では、水路の流速がほかの地点に比べ速く、蛇行する平面形態は、それらを緩和するために採られた可能性が想定される。また、6区では、溝の底面でしがらみ状に自然木を組み合わせており、流速や水量調整の機能を想定したい。



写真3 SD096 しがらみ



写真4 出水 (SD084)

掘立柱建物については、4区で3棟、10区で1棟が検出された。建物の規模はすべて2×3間で、そのうち4区の3棟が東柱の痕跡を残す。4区の建物は、柱穴の重複は確認できず、遺物は確認できるが明確に時期差を示すものではない。しかし、それぞれがかなり近接することや、方位にずれが生じることから、水路に最も近く、柱穴に隅丸方形の掘方を持つS B 4001を最古とし、南

側へと建物が建て替えられていったものと考えられる。

### 中世

古代ほどの大規模な開発の痕跡は確認できないが、12～13世紀前半、14～15世紀の遺構が検出された。

3・4区では、12～13世紀の灌漑水路と、それに近接する鋤溝群が確認された。灌漑水路には、平成26年度に検出されていた



写真5 池状遺構

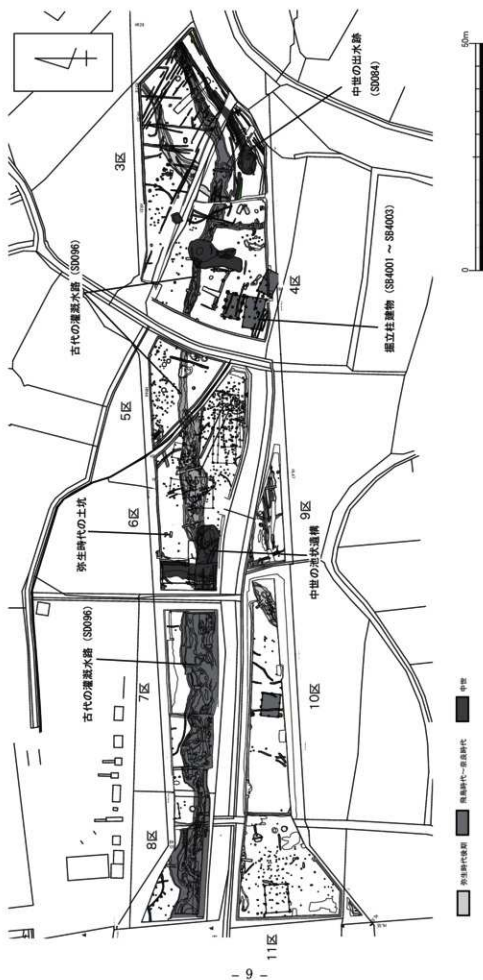
SD096と接続し、調査地の南側の丘陵部の形状に合わせる形で掘られている。遺跡の北を流れる番屋川に水源を求めるものでなく、地下からの湧水を直接溝に流す出水である。水源部分は、なだらかな傾斜で掘られた土坑状のもので、湧水点には曲げ物が据え置かれて、その周辺には、部分的に加工を施した丸木を組み、土砂の流入による湧水点の埋没を防いでいる。かつての谷跡という湧水を獲得しやすい環境を利用している点や、水路掘削を最小限にとどめる水路の平面形態からは、古代にみられるような、地形をある程度度外視した水路の開削よりも、地形に合わせた小規模な開発の様相が想定できる。周辺に井戸や遺物を一定量含む土坑も確認されていることから、周辺に居住域が形成されていたことが想定される。

6区西端には、14～15世紀の池状遺構が確認される。遺構は緩やかな円形を描き、杭と横木を組み合わせたものや、石組みによって作られた護岸を確認することができる。遺構の掘り込みが透水層まで至っていないことから、先述の出水とは異なり、水をためておく池状の遺構としての機能を想定したい。

### 近世

近世については、主に調査範囲の西側、丘陵の縁辺部において多く遺構が検出された。特に6区、11区などにおいては、5棟の建物が復元され、伴出遺物の年代観から、17世紀が主となると考えられる。また、18世紀の石組み井戸が10区において確認されている。

なお、調査中盤の平成27年10月3日には、現地説明会を開催した。



案3区 遺構平面図



きゅうれんべいじょういせき  
旧練兵場遺跡

善通寺市仙遊町に所在する集落遺跡で、既往の調査で縄文時代晩期から中世までの遺構・遺物が確認されているが、中心となるのは弥生時代中期から古墳時代後期にかけての時期である。

今年度の調査は、四国こどもとおとなの医療センターの小規模な病院施設の改修に伴い建物の基礎により遺跡が影響を受ける部分である。調査地は旧練兵場遺跡内の病院の敷地の東端の中央からやや北寄りの部分で、平成25年度に病院建設に伴う東西道路設置等の附帯工事に伴い発掘調査を実施した箇所と6mほど北側に隣接した箇所である。



第4図 遺跡位置図 (1/25,000)

(国土地理院 1/25,000 地形図「善通寺」の一部を加工して利用)

発掘調査の結果、平成25年度の隣接する調査区の流路跡の続きを検出した。流路は下部のものが埋没した後上部の流路が形成されている。流路①としたものは下部の流路で、平成25年度の調査で幅約15m、深さ0.6mの規模で、今回はその東側の一部を検出した。断面形は皿状で埋土は3層に大別され、上層は砂層、中層と下層は黒褐色系の粘質土となっている。弥生時代中期後半から終末期にかけての土器が出土した。流路②は平成25年度調査の幅約7m、深さ0.2mの規模とほぼ同様の規模を検出した。断面形は浅い皿状で、埋土は上下2層に大別され、暗褐色と灰白色の混在した粘質土であるが下層ほど粘性が強い。8世紀から12世紀までの土器が出土している。須恵器が主体となっているが、緑釉陶器や黒色土器も含まれている。

今回の調査地は堅穴建物をはじめ遺構が密集する微高地群の北東側の低地部分であり、検出した流路や出土遺物、旧地形について既往の調査の成果を追認するものとなった。



写真6 7区流路①(西から)



写真7 7区流路②(西から)

## ろくじょうげしよいせき 六条下所遺跡

六条下所遺跡は高松市六条町に所在する。県道太田上町志度線整備に伴い、平成27年11月から平成28年3月まで発掘調査を行った。西から1～3区と3調査区に分けて調査を行った。1区の市道を挟んで西側は空港跡地整備事業に伴って発掘調査を行った空港跡地遺跡である。

最も西側に位置する1区では2面の遺構面を確認した。第1面では掘立柱建物跡2棟、柱穴跡60個、溝状遺構9条、土坑6基が検出された。いずれの遺構も遺物がほとんど出土しなかったため、詳細な時期は不明であるが、埋土が白色シルトであることから江戸時代の屋敷地と考えられる。

屋敷地は、約25m四方の広さを有し、東西棟の掘立柱建物2棟が配される。うち、掘立柱建物1は、梁間2間、桁行6間、床面積約50.6㎡の大型建物で、建物東面と、南北面の一部に柵列を伴う。建物規模より、有力農民層の屋敷地と考えられる。

第2面では、自然流路1条と溝3条が検出された。自然流路は南西から北西に向かって蛇行して走る。空港跡地遺跡I区で検出されたSRI02に連続する自然流路であると考えられる。遺物は風化したサヌカイトが出土しただけで、詳細な時期は不明であるが、縄文時代のものと考えられる。

最も東に位置する3区では古代末から近世の溝7条が検出された。うち3条は周辺に残る条里地割に並行する。

11月28日には発掘体験講座を行い、11名の小・中学生が参加した。



第5図 遺跡位置図 (1/25,000)

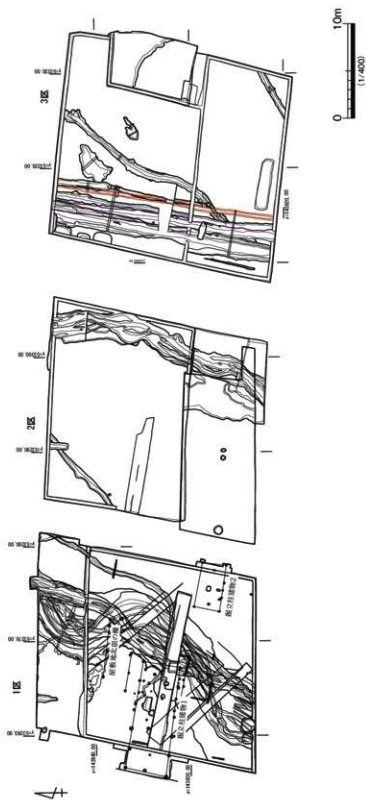
(国土地理院 1/25,000 地形図「高松南部」の一部を加工して利用)



写真8 1区江戸時代の掘立柱建物跡 (東から)



写真9 3区全景 (南から)



第6図 遺構平面図

おたはらたかすいせき  
太田原高州遺跡

県道太田上町志度線道路改築工事に伴う発掘調査は、平成22・23・25・26年度に実施し、その一部は発掘調査報告書の刊行を終えている。今年度は本工事に伴う太田原高州遺跡の最後の発掘調査を実施した。調査地点は路線内の官民境界際のみならず未調査箇所となり、調査面積は113㎡に留まる。調査期間は平成27年6月2～15日、実働9日間で実施した。

調査の結果、弥生時代後期末～終末期の堅穴建物1（SH903）、古墳時代末期の堅穴建物1（SH902）、弥生時代後期末～終末期の大型土坑1（SK801）、ピット十数基等を確認した。

SH903はベッド状遺構を備え、径8m前後の円形の平面プランに復元可能である。床面には炭化物を多量に包含する浅い土坑を認める。SH902は断面で壁溝を確認し、南接する調査区に認める不整形な落ちを考慮すると、東西幅6mの方形の平面プランに復元できる。

SK801は最下層に炭化米を多量に包含する土坑である。平成26年度調査時に南半部の調査を実施し、今年度は残存する北半部の調査を行った。平面形は隅丸方形を呈し、東西幅2.2mを測る。北辺部と東辺分は後世の開発に伴って消失していたが、南北長は2.6m前後に復元できる（写真10）。断面形状は底面に起伏を認めるがおおむね逆台形を呈し、深度は0.5m前後を測る。埋土最下層は炭化米集中層、下層は炭化米・焼土・わずかな炭化材の混在層（3cm前後の層厚）、中層は灰黄褐色粘質シルト（炭化米・炭化材を少量包含）、上層は拳大からその2倍程度の礫と土器の充填層となり、上層下面の中央部は下位に沈み込む。帰属時期は、上層が弥生時代終末期、中層が弥生時代後期末の埋没で、最下層・下層は後期末の可能性が高い。

写真10は最下層の炭化米検出状況である。一見、炭化米が充填された層位に見えるが、その広がりや面的に細かく検出すると、わずかに起伏を認め、かつ30×40cm程度の楕円形のまとまりが複数重複した状態であることが判明した（写真11・12）。まとまりの周囲には単体の炭化米が散乱



第7図 遺跡位置図 (1/25,000)

(国土地理院1/25,000地形図「高松南部」の一部を加工して利用)



写真10 SK801 全景 (南より)

したように分布する。大部分の炭化米には初殻が付着しており、かつ楕円形のまとまり内の個々の初殻の並びが不揃いであるため、穎籾は想定できない。さらに、楕円形のまとまりの重複関係を断面で確認すると、灰褐色系シルトが介在しており（写真13）、元来楕円形のまとまりは立体的な形状を呈していたと想定できる。こうした状況から、楕円形のまとまりは脱穀前の脱粒米を袋に入れた初袋の痕跡の蓋然性が高いと判断した。なお、炭化米として遺存した状況から強い火力による燃焼ではなく、弱火で蒸し焼きされた状態が想定できるが、SK801の底面や側面に被熱痕跡は認められず、焼けた初袋が他所からもたらされたものと考えられる。

調査時の所見として、以下のような本遺構の埋没状況や性格を提示しておきたい。①SK801の本来の機能は不明だが、最下層に炭化した脱穀前の脱粒米を入れた初袋が複数個体「廃棄」される。②炭化材や焼土も共存することから、高床倉庫等で保管していた初袋が焼失し、壁や屋根材の崩落等の要因により蒸し焼き状態となり、③何らかの意図を持って、初袋形状を保持した状態で焼失箇所から抽出し、土坑底面に「廃棄」されたと考えられる。④中層は初袋「廃棄」直後に焼失した高床倉庫の部材等を「廃棄」した可能性が高い。⑤その後、弥生時代終末期に土坑上位に土器や礫が廃棄される。上層下面の窪みは初袋や高床倉庫の部材の腐朽による間隙が沈み込むことで生じたものと考えられる。⑥路線内では焼失した掘立柱建物は確認できないが、近接した箇所には所在する可能性が高い（SH903の帰属時期はSK801とほぼ同時期）。

一方、こうした想定は他所で焼失した初袋をその形状を保持した状態で「廃棄」する行為を前提としており、容易に是認できるものではないという指摘もある。ここでは、かっこ付きの廃棄という表記で本行為を表現したが（埋納に近い概念）、検出した楕円形のまとまりを最大限評価し、弥生人の米に対する観念が表出された炭化した初殻等の「廃棄」土坑と考えたい。なお、本遺構出土の炭化米については、樹種同定、CTスキャンによる科学的分析を実施し、同時に取り上げた炭化米塊の保存処理も行った。



写真11 楕円形のまとまり検出状況（北より）



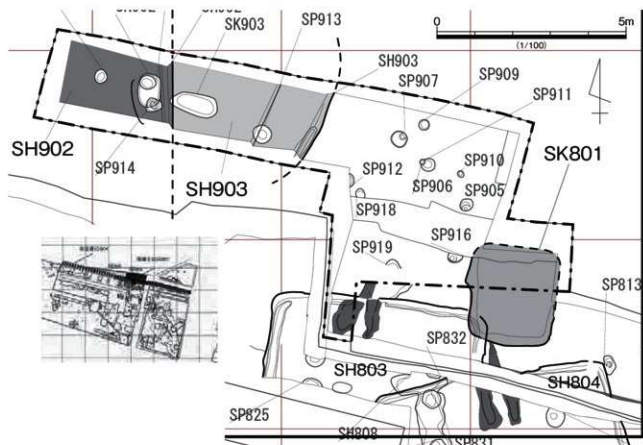
写真12 楕円形のまとまり拡大（北より）



写真13 楕円形のまとまり重複状況（北西より）



写真14 炭化米拡大（南西より）



第8図 遺構平面図 (S = 1 / 100, 一点破線が今年度調査区)



## なかまたきたいせき 中又北遺跡

中又北遺跡は、県道多度津丸亀線建設に伴い、平成 27 年度から調査を行っている多度津町道福寺中又に所在する遺跡である。遺跡の立地としては、丸亀平野の西端、金倉川が形成する扇状地の扇端付近に位置する。

中又北遺跡の周辺の遺跡として、西側には、弥生時代～近世までの集落遺跡である庄八尺遺跡が隣接しているほか、遺跡の東には、弥生時代中期の土器がみつかった中又遺跡がある。

平成 27 年度の調査区は、現在の町道を挟んで 1-a、1-b 区とし、調査を行った。

遺構面は現代の耕作土直下に、黄色シルト層が確認される。遺構面は 1 面しか認められず、それらを掘り込むように弥生時代～古代末の遺構が確認された。なお、弥生時代の遺構については断言できないが、少なくとも古代以降の遺構については、遺構の深度から考えても残存状況が悪く、当時の地表面は大きく削平を受けていると考えられる。

今回の調査では、弥生時代全般にわたって使用されていた大型灌漑水路とその周辺の遺構の検出、平安時代後期の建物を検出したことが成果としてあげられる。

以下、各時期の遺構について説明する。

### 弥生時代

弥生時代の遺構としては、溝 2 条、掘立柱建物 1 棟、土坑 1 基が検出されている。

溝については、基幹水路と考えられる SD1002 と、後出して開削されたと考えられる SD1001 がある。

SD1002 は、北東方向に向かい、緩やかに曲がりながら流れる平面形態をもつ。弥生時代前期から古墳時代前期までの遺物が出土し、その

期間に機能していたと考えられる。弥生時代前期の段階で行われたと考えられる当初の開削の後、溝が埋没していく中で、小規模な溝も含め最低二回以上の再掘削が行われている。個別の溝の存続期間や並行の有無などは、今後検討すべきであるが、最終の埋没に伴うと考えられる黒色粘質土中からは、弥生時代後期後半～古墳時代前期を中心とした遺物が多くみられる。最終的にはす



第 9 図 遺跡位置図 (1/25,000)

(国土地理院 1/25,000 地形図「丸亀」の一部を加工して利用)



写真 15 調査区全景と灌漑水路

すべての溝の範囲は10 m程の幅となる。

SD1001は、幅3.2 m程でSD1002に比べ小規模であり、調査区を横断するようにほぼ直線的に伸びる溝である。出土遺物からは弥生時代後期後半以降に開削された可能性が考えられ、SD1002の機能時に、新たに開削された溝であると考えられる。

なお、1b区においては、2条の延長が確認され、2条の溝は合流するように近接する。

それ以外の遺構については、掘立柱建物1棟と、土坑が1基検出されているのみである。



写真16 SD1002上層 弥生土器出土状況



写真17 SD1002断面



写真18 SB1002

#### 古代末（平安時代後期）

古代末（平安時代後期）の遺構としては、1a区において掘立柱建物が1棟検出された。SB1001とした建物は、一部調査区北側に展開する可能性もあるが、現在確認されている範囲では、柱間4×5間で、側柱のほか、ほぼ同じ規模の床束の柱を持つ総柱建物である。東側に柱間が狭い柱穴列が存在し、廂の可能性が想定される。廂の部分を除いた床面積は72㎡を測り、県内の古代末の建物としても大きな部類に入る。

柱穴の深度は深いものでも20cmほどしかなく、上部は大半が後世の開発により削平されていたものと考えられる。柱穴出土遺物については、弥生時代の遺物の混入もあるが、建物を構成す



る柱穴から出土した黒色土器からは11世紀末から12世紀前半の年代が考えられるため、建物の時期もこの段階にあたるものと考えられる。

当該期には、中又北遺跡周辺では、多度庄・葛原庄などの荘園が盛んに作られる。中又北遺跡はそれらの範囲の中に含まれるものではないが、大型建物の存在は荘園が形成されるような、一定程度生産力のある地域の基盤を、この建物を含む集落が担っていた可能性は高いといえる。



写真 19 SB1001



写真 20 SB1001 柱穴黒色土器出土状況



第10図 遺構平面図

## 岸の上遺跡

岸の上遺跡は、丸亀市飯山町川原に所在し、平成25年度より国道438号の建設に伴う発掘調査が行われている遺跡である。

遺跡の周辺は、条里型地割の乱れからうかがえるように、旧河道が多く流れ、飯山高校北側を東西に走る市道周辺に形成されていた微高地を中心に集落域が展開していることが、これまでの調査でも明らかとなっている。

平成27年度は、平成26年度調査範囲より、さらに北側の区域の調査を行った。

調査区を5、6区に分けて調査を行い、5区は3面、6区は2面の遺構面が確認できた。

主な調査成果として、中世以降の遺構の検出、飛鳥時代の水田域の検出、古墳時代後期の集落の延長の確認があげられる。以下、1～3面とした遺構面ごとの成果について説明する。



第11図 遺跡位置図 (1/25,000)

(国土地理院1/25,000地形図「丸亀」の一部を加工して利用)

### 1面 (古代～近世)

中・近世の遺構が中心であるが、部分的に8世紀以降の古代の遺跡も確認できる。

遺構は、旧河川の氾濫によって堆積した細砂と礫がまじる層をベースとして掘り込まれている。中世・近世の主要な遺構として、集石土坑と大溝が挙げられる。調査区の各所に、楕円形の集石土坑が多く検出された。深さはさまざまであるが、その埋土には礫を多く含むことが共通している。



写真21 5区第1面

出土遺物から、近世段階に周囲の耕作地化が進められる過程で、不要な礫などを投棄した土坑であったと考えられる。

中世の遺構は5・6区を南北に縦断する大溝 (SD5008) が挙げられる。溝の特徴としては、5区においてのみであるが、底面が一定の間隔で高くなる形状をもつ。埋土の断面から、底面付近では流水痕跡が確認できるため、底面の構造は水路の管理を行うためのものであると考えられる。

古代の遺構は平成26年度調査で検出されていた大溝 (SD4028) の続きが検出された。掘方は1面を構成する礫層まで上がっており、断面形状はV字状となる。埋土は大きく分けて3段階に分層できる。

上層では9世紀前半の須恵器杯を確認しており、最終埋没はその時期と考えることができる。中層段階では、溝内部に細い流路があり、木樋の据え付けられていた痕跡も確認された。下層からは、8世紀を中心とした須恵器のほか、斎串や曲物、菰植などの木製品が多く出土した。



写真22 6区 古代大溝 (SD4028) 断面



写真23 6区 古代大溝 (SD4028) 出土木製品

## 2面 (古墳時代終末期)

洪水堆積によって形成された面である。遺構の密度は希薄で、この面の存続期間もさほど長くないものと考えられる。また、6区ではこれに相当する遺構面は確認できないため、5区のみ2面の調査を行った。

遺構としては、水田の痕跡が確認できた。区画の形状は不定であるが、東西、南北方向に近い方向の畦畔が確認できた。



写真24 5区2面 水田畦畔

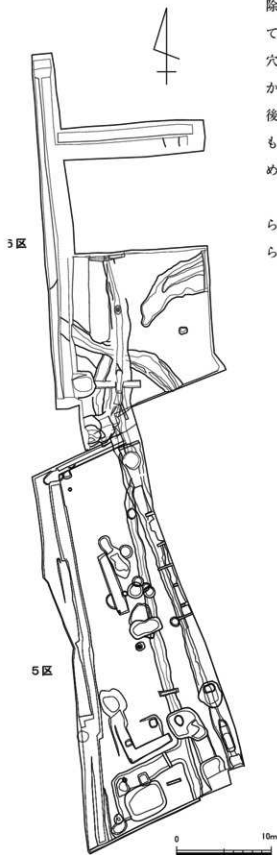
2面での遺物はごくわずかであるが、畦畔の盛土中より、須恵器杯・蓋が出土している。形態から7世紀前葉に比定され、このことから水田の形成は7世紀前葉以降と考えられる。この年代は後続する1面、先行する3面とも整合する。

## 3面 (古墳時代後期)

過年度調査において、古墳時代後期の集落が確認されていた面である。全体的に遺構の密度は希薄であるが、5区と6区の境界付近で、平成26年度に検出された総柱建物の延長を確認した。建物はやや方位が異なる2棟が並列しており、2棟の建物の周囲を同時期の溝が北辺を



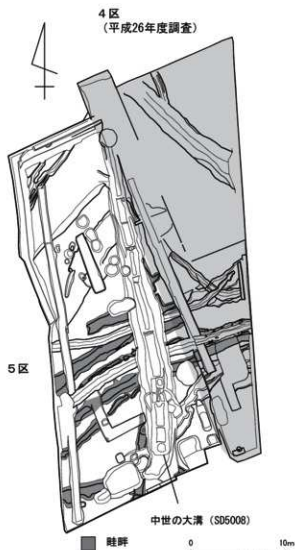
写真25 6区 3面掘立柱建物



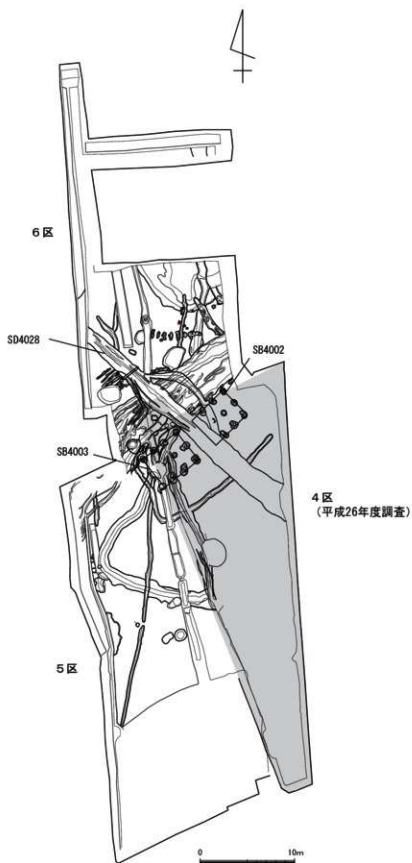
第12図 第1面 遺構平面図

除く3辺に廻る。東側の建物については、SD4028によって一部削平されているが、2×3間とした場合、西端の柱穴列が他の側柱と規模が異なることや、西の建物との関係からも、2棟とも3×4間の建物と考えられる。古墳時代後期の総柱建物としては、同時期の県下の集落遺跡の例でも、比較的規模は大きく、遺跡全体の中での位置づけも含め、今後の検討課題となる。

そのほかの遺構としては小規模な溝やピットが少数認められるのみであり、6区の北側部分では、遺構の密度はさらに希薄となる。



第13図 第2面 遺構平面図



第14図 第3面 遺構平面図

### かもういせき 蒲生遺跡

本遺跡は小豆郡小豆島町蒲生に所在する弥生時代から近世にかけての遺跡である。遺跡の南側は池田湾に面し、北側には標高427.2mを測る太麻山がある。太麻山の南西斜面からは尾根と谷が派生し、ここから供給される土砂と海からの潮流により浜堤が形成され、遺跡はその上に立地する。大きな河川はなく、角田川・奥の谷川といった小河川が近接する。また、西側及び東側は共に太麻山から派生する尾根が海の方へ張り出して形成されたあさぎ岬、飛岬によって囲まれる。周辺にはあさぎ岬の反対側に位置



第15図 遺跡位置図 (1/25,000)

(国土地理院1/25,000地形図「土庄」の一部を加工して利用)

する弥生時代の遺物を伴う入部遺跡、飛岬の反対側に位置する西風呂遺跡などが知られるが、詳細は不明である。遺跡が形成された基盤層や遺構の埋土は、遺跡が砂堆上に立地することもあり、全体的にやや粘質を伴う細砂質土からなる。堆積状況から大きく2面に分けて調査を行った。調査区は地割に従い、北半をⅠ区、南半をⅡ区として設定した。

#### 第1面 (中世末～近世)

ほぼ平坦な地形であるが、Ⅰ区北側が若干高い。遺構はこの高い北側に集中し、Ⅰ区南半以南では希薄である。特にⅡ区は後世の造成などに伴い、著しく改変されている。この面では、柱穴6基、土坑1基、溝状遺構6条、性格不明遺構18基を検出した。注目されるのは、Ⅰ区北側で検出した性格不明遺構17基である。平面形は楕円形を呈し、大きく分けて長軸4m程度、短軸3m程度の大型のものと、長軸2m程度、短軸1.5m程度の小型のものに分類できる。断面形状は逆台形で、深さは共に1m弱である。底面と壁面に約0.1mの厚さで粘土を貼ったものが認められ、水を溜める目的で構築されたと考えられる。粘土直上に堆積する土が泥質であり、その上には粘土ブ



写真26 第1面北端鹹水槽群



写真27 鹹水槽 SX1010 完掘



ロックなどを含む締まりの悪い砂質土が堆積する。また、粘土を貼ったものについては底部中央付近に平坦な礫が据え置かれるものがあり、礎石として機能したと考えられる。このような構造の遺構は、小豆島町に伝わる延享3年の文献に認められる塩田関連の施設で鹹水を貯蔵する「汐壺」と称される構造物に類似しており、鹹水槽である可能性が高い。17基は全て同時に構築されたのではなく、最大4基の重複関係が認められることから、少なくとも4時期に細分が可能である。ただし、先述した通り、形状からはその差異は認められない。また、出土遺物は中世前半期以前のもものが主体となり、遺構の時期を明確に示すものはない。下位にある包含層起源と考えられるものが、埋め戻し土に混じったと考えられる。一部で15世紀代と考えられる遺物を含むことから、それ以降の構築であるとしておく。

## 第2面（弥生時代～中世前半）

南半が削平されているが、堆積状況を確認すると南北両端がやや緩やかに高くなり、中央付近が若干窪む地形である。南半を除くほぼ全面で、柱穴を主体とした遺構が確認できた。この面では柱穴256基、溝状遺構8条、土坑14基、性格不明遺構9基を確認した。柱穴は、出土遺物からその大半が14世紀前半頃のものと考えられるが、一部12世紀代のものと考えられるものも含まれる。これらの柱



写真28 I区第2面全景

穴の一部は掘立柱建物の一部を成しており、不完全な形状のものを含め13棟を復元した。建物の時期は明確にしがたく、出土遺物には12世紀代のものと14世紀代のものが含まれる。出土遺物の状況は、建物を構成しない他の柱穴と同じである。溝状遺構は中世以降のものが主体となるが、一部古墳時代後期頃のものを含む。土坑はやはり中世のものが主体となるが、弥生時代後期のものや古墳時代後期のものが混じる。特筆する点として、中世前半の遺物を伴うもので底面が著しく被熱・固結しており、底面直上に炭化物の堆積が認められるうえ、その中から鉄滓が多数出土するものがあり、その状況から鍛冶炉であったと考えられる土坑を確認している。周辺からも焼形滓や破損した鉄製品などが出土することから、小規模な鍛冶作業が行われていたことが窺える。

性格不明遺構はI区南半に集中する。比較的大型であるが浅い不整形な落ち込みとして捉えられ、埋土中からは古墳時代後期後半頃の須恵器が主体的に出土している。ほぼ同時期のものと考えられる製塩土器（備讃Ⅵ式・Ⅶ式）の小片が伴う。また、これらは8世紀～10世紀代の遺物を含む層に覆われており、最終埋没がそのころであると考えられる。

全体的に見て出土遺物は中世前半期のものが主体を占めており、瓦器椀、小皿、吉備系のものを多く含む土師質土器椀・小皿、輸入陶磁磁などが認められる他、土鍾が若干目立つ。鉄製品も若干出土しており、その中には釣針も認められる。また小片化しているものの古墳時代後期後半の製塩土器が多く伴う。これを主体とする遺構があるほか、各遺構に混入して出土する。また、

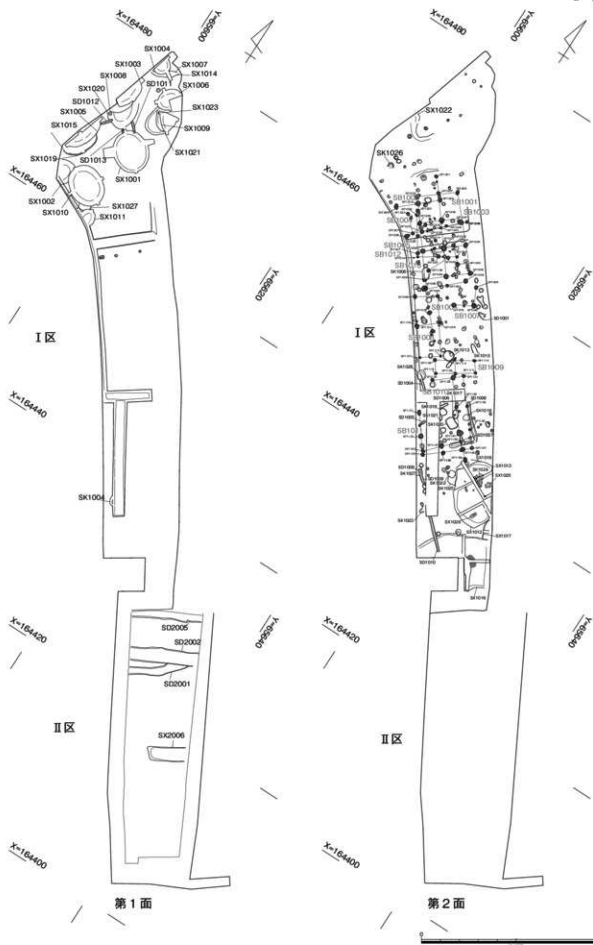


若干量弥生時代から古墳時代前期の遺物を伴う。内容は製塩土器を主体とするが、甕などの小片もわずかに伴う。

## まとめ

蒲生遺跡は第1面の状況から対象地を含む近辺で塩田が営まれていた可能性が高い。検出した鹹水槽について、構築された明確な時期は明らかにしえなかったが、文献によると少なくとも15世紀以降、小豆島内で塩生産が行われ、蒲生遺跡の所在する蒲生においても塩田の存在が記録されていることから、これに関連する遺構であった可能性は十分指摘できる。今後、同様な立地をする塩田遺跡において同様の遺構が検出されることが期待される。

第2面では、複数時期の遺構を同一面で捉えていることから詳細な変遷などを押さえることが困難であるが、少なくとも中世前半段階には掘立柱建物を伴う集落が形成されたことが分かる。出土遺物の中に土錘・鉄製釣針などが含まれていることから、遺跡の立地から見ても漁撈がその生業の一部であったと考えられる。それとともに輸入陶磁や瓦器、吉備系土師質土器碗など島外に産地を求めるべきものが一定量出土することから、海運に伴う物資の集積地であった可能性も考えられる。島内において同時期の遺跡について、特に立地を同じくするものの調査事例が無いことから比較は困難であるが、今後の事例増加による比較検討が望まれる。更に、前代の古墳時代後期後半を主体とする製塩土器についても、製塩関連の遺構が認められないことから主たる生産域からは外れていると考えられるが、周辺での製塩土器表採が記録されているなど、近接した位置での生産域の存在が想定できる。周辺を含めた今後の調査が求められる。



第16図 遺構平面図(1 / 400)

## 2. 普及・啓発事業

## (1) 展示

## ①香川県埋蔵文化財センターでの展示

タイトル	場所	会期
遺跡・遺物からみた香川の歴史	第1展示室	4月1日～9月18日、1月6日～3月31日
発掘調査速報展	第2展示室	4月23日～7月14日
第1回四国地区埋蔵文化財センター発掘へんろ展 四国の黎明	第1展示室	9月30日～12月24日
讃岐国府跡を探る6	第2展示室	4月1日～5月11日
発掘された綾川町の遺跡 西末則遺跡展	第2展示室	5月14日～7月14日
夏休みこどもミュージアム わかしのひとの図画工作	第2展示室	7月21日～8月31日
仲戸東遺跡と香川の埴輪	第2展示室	9月4日～12月21日
讃岐国府跡を探る7	第2展示室	1月8日～3月31日

第9表 展示一覧

単位：人

一般			団体								合計		
大人	子ども	計	団体数				構成員数						
			一般	高校生	小・中 学生	幼稚園	計	一般	高校生	小・中 学生		幼稚園	計
1,406	185	1,591	16		7		23	435		227		662	2,253

第10表 入館者数一覧

## ②香川県埋蔵文化財センター以外の施設での展示

タイトル	場所	会期	観覧者数(人)
讃岐国府跡を探る6	高松市讃岐国分寺跡資料館	5月12日～6月28日	759
讃岐国府跡を探る6	三豊市宗吉かわらの里展示館	7月4日～7月26日	712
讃岐国府跡を探る6	まんのう町琴南ふるさと資料館	7月28日～8月30日	167
讃岐国府跡探索事業展示	水のフェスティバル in 府中湖	10月4日	10,000
鹿伏中所遺跡写真展	三木町池戸公民館	9月9日～9月30日	207
多肥地区文化祭 「埋蔵文化財展」	高松市多肥コミュニティセンター	10月25日～10月30日	70
川添文化祭 「高松市茶白山古墳」発掘写真展	高松市立川添小学校	11月7日～11月8日	600
町田地区の埋蔵文化財展	東かがわ市丹生コミュニティセンター	11月22日	110
讃岐国府跡を探る6	坂出市郷土資料館	11月1日～11月29日	153
讃岐国府跡を探る6	観音寺市立中央図書館	12月23日～1月10日	202
讃岐国府跡を探る6 発掘された綾川町の遺跡 西末則遺跡展	綾川町立生涯学習センター	1月19日～2月14日	274

讃岐国府跡を巡る6	東かがわ市歴史民俗資料館	2月20日～5月15日	173
第1回四国地区埋蔵文化財センター発掘へんろ展 四国の黎明	松山市考古館	4月25日～7月12日	3,789
	高知県埋蔵文化財センター	7月18日～9月18日	1,645
	徳島県立埋蔵文化財総合センター	1月12日～3月13日	1,513
	合 計		20,374

第11表 センター外展示一覧

## (2) 現地説明会・地元説明会

	内容	実施日	対象	見学者数(人)
1	蒲生遺跡現地説明会	5月10日	一般	240
2	内間遺跡現地説明会	10月3日	一般	80
3	讃岐国府跡現地説明会(地元・県職員対象)	2月13日	地元ほか	70
4	讃岐国府跡現地説明会(一般対象)	2月14日	一般	130
5	讃岐国府跡第33次調査地発掘調査報告会	3月6日	一般	140
	合 計			660

第12表 現地説明会・地元説明会一覧

## (3) 講師の派遣

## ①体験講座など

	依頼者	実施日	場所	内容	対象	人数(人)
1	むきばんだまつり	9月23日	鳥取県立むきばんだ史跡公園	アンギン堀み	一般	38
	合 計					38

第13表 体験講座への講師派遣一覧

## ②学校

	学校名	実施日	内容	対象	人数(人)
1	まんのう町立琴南小学校	11月27日	土器炊飯	6年生	10
	合 計				10

第14表 学校への講師派遣一覧

## ③その他

	依頼者	実施日	内容
1	高松市讃岐国分寺跡資料館友の会	5月23日	講演
2	宇多津町教育委員会	5月14日	講演
3	宇多津町教育委員会	6月10日	講演
4	宇多津町教育委員会	7月9日	講演
5	宇多津町教育委員会	9月3日	講演
6	宇多津町教育委員会	10月14日	講演
7	明倫市民教養講座	7月16日	講演
8	清水園と地域を結ぶ会	7月22日	講演
9	高野山真言宗香川青年教師会	8月19日	展示解説・体験講座

10	さぬき市文化財保護協会寒川支部	8月23日	講演
11	三木町文化財保護協会	9月12日	講演
12	蓬萊歴史研究会	9月15日	講演
13	府中湖水のフェスティバル実行委員会	10月3日	遺跡案内
14	府中老人クラブ連合会	11月12日	講演
15	高松大学	12月12日	国府案内
16	蓬萊歴史研究会	1月19日	講演
17	公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター	1月31日	講演
18	坂出市生涯学習課	2月6日	国府案内
19	高松市老人クラブ連合会	2月16日	講演

第15表 講演等への講師派遣一覧

## (4) 夏休み子どもミュージアム

7月21日～8月31日に夏休み子どもミュージアムを行った。

実施日	タイトル	内容	人数(人)
7月21日～8月31日	むかしのひとの図画工作	展示	378
7月21日～8月21日	遺跡の自由研究サポートアスク	自由研究のアドバイス	3
7月25日、8月5日	古代をたいけんしてみよう。	土器作り、ガラス玉作り、アンギン編みでポシェット作り	34
7月29日	古墳見学 石清尾山古墳群	古墳見学	8
合 計			423

第16表 夏休み子どもミュージアム実施事業一覧

## (5) 発掘体験講座

11月27日に六条下所遺跡で発掘体験講座「発掘してみよう」を行なった。小・中学生11名が参加した。

## (6) 考古学講座

専門職員が講師を務める考古学講座を4回開催した。

回	実施日	タイトル	講師	人数(人)
1	8月8日	墳墓からみた讃岐の古代から中世	蔵本晋司	31
2	10月10日	香川県の横穴式石室～導入から展開～	松本和彦	30
3	12月12日	建物から見た古墳時代から古代の讃岐	竹内裕貴	30
4	2月13日	古墳の話～古墳時代が始まった頃を中心に～	真鍋貴匡	31
合 計				122

第17表 考古学講座一覧

## (7) 文化ボランティア活動

文化ボランティアは、事業の記録撮影や普及事業の補助などを行った。7名が登録し、9回、延べ22名が活動に参加した。

## (8) 新聞記事掲載

四国新聞に「古からのメッセージ③ さぬき考古学タカラ箱」として、計47回の連載を行った。讃岐国府跡探索事業に関連した内容「讃岐国府を考える」(12回)、香川県内の著名な遺跡をあいうえお順で紹介する「讃岐考古学あいうえお」(25回)、「第1回四国地区埋蔵文化財センター発掘へんろ展」の内容を紹介する「発掘へんろ展から」(10回)で構成した。

## (9) 資料の貸出・利用

区分	学校・大学	研究会・同好会	教育委員会・博物館・その他公共団体	出版社・新聞社・その他民間企業	個人・他	合計
遺物	6		17		11	34
写真・パネル	1		10		5	18
レプリカ・模型						
合計	7		27		13	52

第18表 資料貸出・利用一覧(数字は件数)

## (10) 職場体験学習・インターンシップ

	学校名	期間	内容	人数(人)
1	香川県庁インターンシップ	8月24日	職場体験	3
2	高松市立香東中学校	9月7日～9月11日	職場体験	3
3	坂出市立白峰中学校	11月10日～12日	職場体験	3
	合計			9

第19表 職場体験学習・インターンシップ一覧

## (11) 刊行物

- 『香川県埋蔵文化財センター年報 平成26年度』
- 『いにしへの讃岐』86号～89号

## (12) ホームページ

ホームページ (<http://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/>) の更新を随時行った。

トップページビュー数 24,779

### 3. 讃岐国府跡探索事業

「香川県文化芸術文化振興計画」に基づき平成21年度から開始した讃岐国府跡探索事業は、平成27年度で7年目を迎える。主な調査事業としては讃岐国府跡の遺構内容の確認を目的とした発掘調査を実施した。讃岐国府跡を活用した情報発信による主な広報活動事業は、まち歩きや事業成果報告会を開催した。

讃岐国府跡の発掘調査は開法寺跡東側で見つかった大型建物の全体像を明らかにすることなどに主眼を置いた。調査の結果、大型建物が3棟見つかった。これらは廂をもつかなりの格式をもった建物で、奈良時代終わり頃から平安時代後半までの約200年間、同じ場所で建て替えられたことがわかった。また、建物西側の開法寺伽藍との間の部分では南北方向の欄列や溝が数条見つかり、この場所に繰り返し境界を設け続けたことがわかった。

#### (1) ボランティア活動

・登録人数	24人
・延べ人数	371人

#### (2) 地域との交流

内容	実施日	参加人数
「第17回 水のフェスティバル in 府中湖」国府ゆかりの史跡を歩く	10月3日	80人
「第17回 水のフェスティバル in 府中湖」展示	10月4日	10,000人
讃岐国府跡現地説明会	2月13日	70人

#### (3) 情報発信

内容	回数
ホームページへの記事掲載	5回
情報誌「いにしへの讃岐」への記事掲載	2回
新聞への連載記事掲載	12回
地元ケーブルテレビガイドブックへの記事掲載	2回
庁内掲示板への掲載	1回
NHK出演	1回
KSB出演	1回
KBN出演	1回

#### (4) 関連行事

行事名	会場	実施日	参加人数
まち歩き「国府の里を歩く」	坂出市府中町	11月21日	17人
展示「讃岐国府跡を探る6」	香川県歴史文化財センター	4月1日～5月11日	193人
展示「讃岐国府跡を探る7」	香川県歴史文化財センター	1月8日～3月31日	448人
出張展示「讃岐国府跡を探る6」	高松市讃岐国分寺跡資料館	5月12日～6月28日	759人
出張展示「讃岐国府跡を探る6」	三豊市宗吉かわらの里展示館	7月4日～7月26日	712人
出張展示「讃岐国府跡を探る6」	まんのう町琴南ふるさと資料館	7月28日～8月30日	167人
出張展示「讃岐国府跡を探る6」	坂出市郷土資料館	11月1日～11月29日	153人
出張展示「讃岐国府跡を探る6」	観音寺市立中央図書館	12月23日～1月10日	202人
出張展示「讃岐国府跡を探る6」	綾川町生涯学習センター	1月19日～2月14日	274人
出張展示「讃岐国府跡を探る6」	東かがわ市歴史民俗資料館	2月20日～5月15日	173人

出張講座 高松市讃岐国分寺跡資料館友の会「讃岐国府の最新発掘調査成果」	高松市讃岐国分寺跡資料館	5月23日	30人
出張講座 清水園と地域を結ぶ会「讃岐国府跡の発掘調査について」	救護施設清水園	7月22日	20人
出張講座 さぬき市文化財保護協会寒川支部「ほぼ確定した古代の讃岐国府について」	さぬき市寒川公民館	8月23日	65人
出張講座 府中老人クラブ連合会「讃岐国府と坂出の海岸線」	府中老人いこいの家	11月12日	76人
発掘調査現地説明会(地元・県職員対象)	讃岐国府跡発掘調査地	2月13日	70人
発掘調査現地説明会(県民対象)	讃岐国府跡発掘調査地	2月14日	130人
現地見学 高松大学	讃岐国府跡発掘調査地	12月12日	20人
現地見学 坂出市教育委員会生涯学習課「讃岐国府跡発掘現地見学」	讃岐国府跡発掘調査地	2月6日	25人
シンポジウム「讃岐国府跡第33次調査地発掘調査報告会」	坂出市民ふれあい会館	3月6日	140人



### Ⅲ 讃岐国府跡第33次調査成果の概要

**遺跡名** 讃岐国府跡

**所在地** 坂出市府中町本村

**調査主体** 香川県教育委員会

**調査担当** 香川県埋蔵文化財センター

**調査期間** 平成27年10月1日～平成28年3月18日

**調査面積** 680㎡

**出土遺物** 土器・瓦・金属器等 整理箱120箱

#### 1. 調査成果の概要

調査の結果、飛鳥時代から鎌倉時代の遺構を確認した。この中で、飛鳥時代の堅穴建物(住居)群を除くと、全て讃岐国府跡に関係する建物等の遺構となり、大きな成果があった。中でも注目されるのは33-2区の大型建物1～3である。大型建物1～3は、奈良時代の終わり頃(8世紀末葉)から平安時代(11世紀前葉)にかけての建物であり、廂を備えて同一地点で複数回建て替えられている。現時点で具体的な性格を明らかにするためには、今後の調査・検討が必要であるが、今後の調査における定点となる大型建物を全面的に検出した点は大きい。

大型建物の他にも調査区のはほぼ全域で奈良時代から平安時代にかけての大型建物を含む建物群が連続と営まれており、現在調査を進めている国府城南部のエリアが讃岐国府における中核部であることを示していると言えよう。

#### 2. 各時代の調査成果

・飛鳥時代 7世紀中葉の堅穴建物(住居)群が多く検出されている。堅穴建物(住居)群は一定エリアの中で盛んに建て替えられており、かなり重複した状態で検出されている。また、作り付けの廂(かまど)をもたないものが多く、同時代の県内の他の遺跡の事例と比べて相違がある。突如として営まれる堅穴建物(住居)群の時期が隣接する古代山城の城山城の築城推定年代に合致することもあり、両者の関連性が注目される。

#### ・飛鳥時代末葉～奈良時代初頭

真北を基準とした建物群や溝が検出されている。これらの建物群はこれまでの調査でも確認されていたが、今年度調査の33-1区においても3棟の建物を検出した。これらの建物群は規格的に配置されている可能性が高く、所謂「官衙的」と言える条件を備えている。建物1200と建物1201は北側の梁行を揃えて並列するように建てられており、柱穴の大きさや柱間からみて建物1200は中心的な建物の一つと考えられる。また、建物1201と建物1202は直列して配置されていると考えられ、柵列等で連結されている可能性もある。

これらの真北を基準とした建物群の性格や後に設置される讃岐国府との関係については、現時点で建物群の広がりや不明なこと、造営時期が飛鳥時代末葉から奈良時代初頭と考えられることもあり、今後の調査の進捗を待って検討していく必要がある。

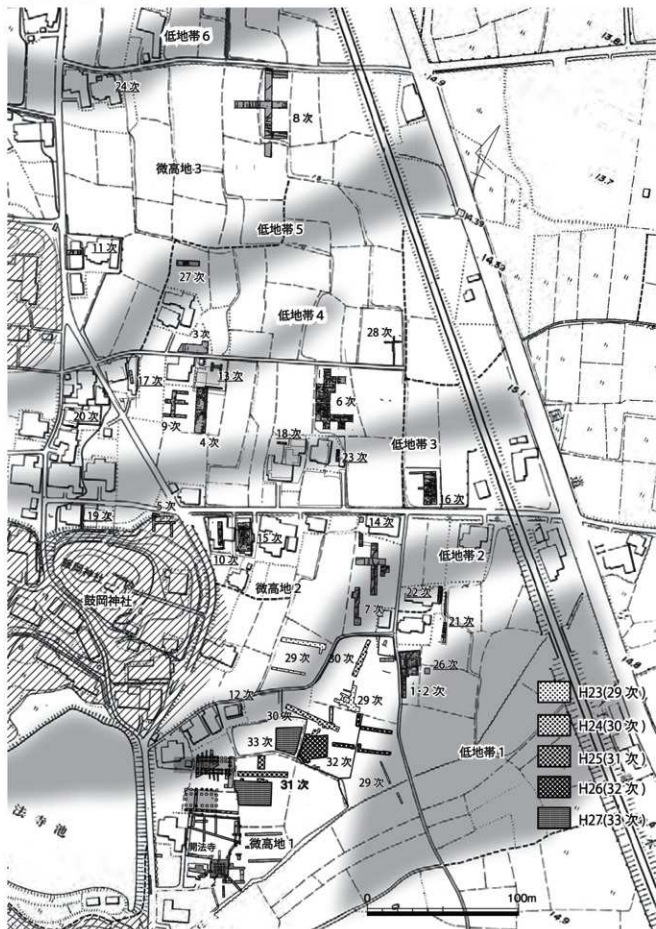
#### ・奈良時代から平安時代

今年度調査では33-1・33-2区のほぼ全域で建物を確認した。昨年度の32次調査で確認した大型柱穴列は梁間3間、桁行3間の南北棟の大型建物となることが明らかになり、東西棟の大型建物となる当初の想定と異なった結果になったものの、奈良時代から平安時代にかけて継続して造営された建物を多く検出し、継続して営まれた官衙建物群の様相を明らかにすることができた。奈良時代から平安時代におけるこれらの建物群の細かな年代については、今後とも検討していく必要があるが、今回の調査では33-2区の大型建物1～3が注目される。大型建物1～3は、いずれも東西棟であり建物主軸線・位置を踏襲して連続して造営される。平面的な検出状態から大型建物1→大型建物2→大型建物3へ2回の建て替えが行われ、出土した土器資料から大型建物2は平安時代9世紀末葉から10世紀初頭、大型建物3が平安時代11世紀前葉に柱が抜き取られたことは推定できる。しかし、大型建物1・2の柱穴には数回柱を据えなおした痕跡が認められており、大型建物1・2の造営年代については不明な点が多い。大型建物2の最終的に柱が抜き取られた年代が9世紀末葉から10世紀初頭であることや、大型建物1・2に複数回柱が据え直されている状況からみて、暫定的に大型建物1は奈良時代末葉である8世紀末葉に、大型建物2は9世紀代を中心に機能したと考えておきたい。

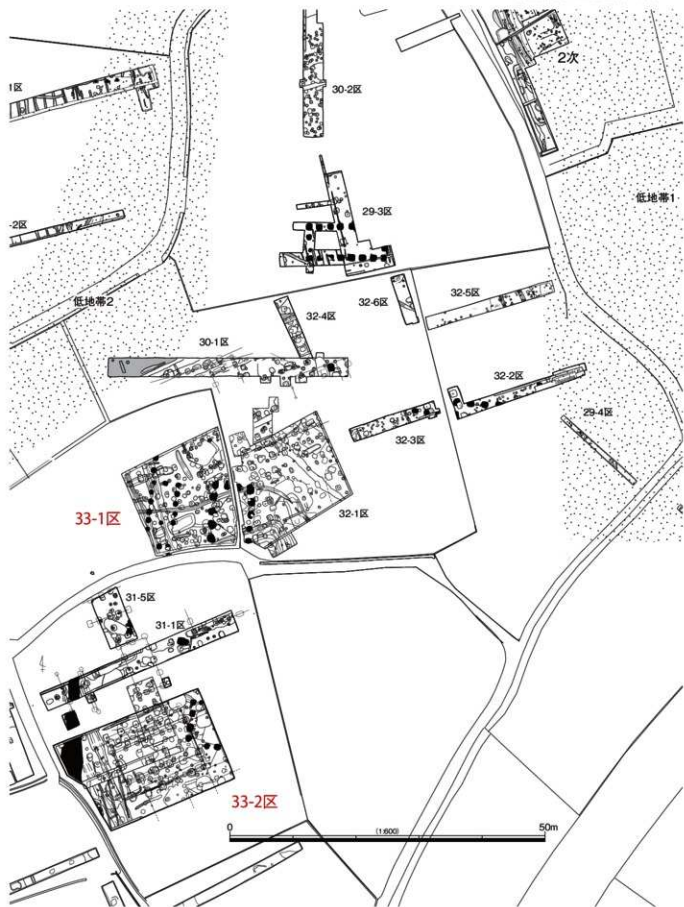
大型建物1は梁行2間、桁行5間で南側に廂をもつ「片廂」と呼ばれる構造をもち、廂を含めた建物総面積は約100㎡であり、柱穴の規模も最も大きい。大型建物2は梁行2間、桁行5間で南北に廂をもつ「二面廂」の構造をもち、総面積は約140㎡を測る。大型建物3は梁行2間、桁行5間で東西南北に廂をもつ「四面廂」の構造をもち、総面積は約120㎡である。

総面積が100㎡を超えた大型建物が約200年間に涉って同一地点で建て替えられたことになる。各段階の廂の面数は異なるが、この時代の同規模の廂付建物は讃岐国分寺などを中心に数例知られているのみであり、かなりの格式をもった建物と推定することができるが、讃岐国府におけるこの建物の具体的な性格やこれまでの調査で確認している周辺の建物群との関係については今後の調査・検討が必要である。

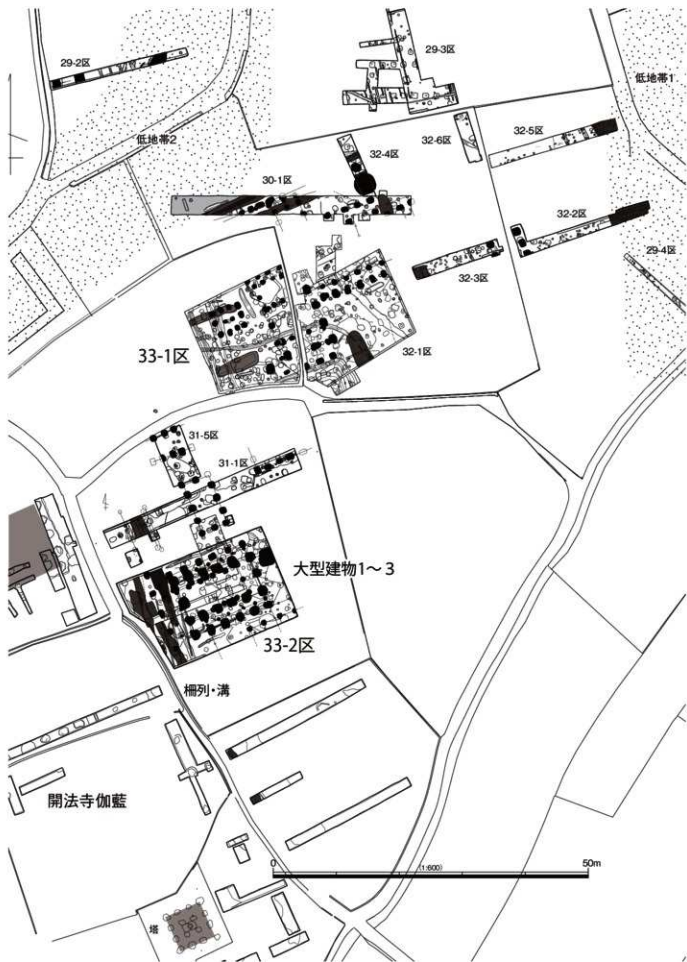
また、大型建物1～3の西側の開法寺伽藍との境界には横列や溝が連続して営まれており、これらの点が大型建物の性格を考える際に重要な手掛かりとなる。



第17図 讃岐国府跡における既往の調査地と地形



第18図 遺構配置（飛鳥時代末葉～奈良時代初頭）

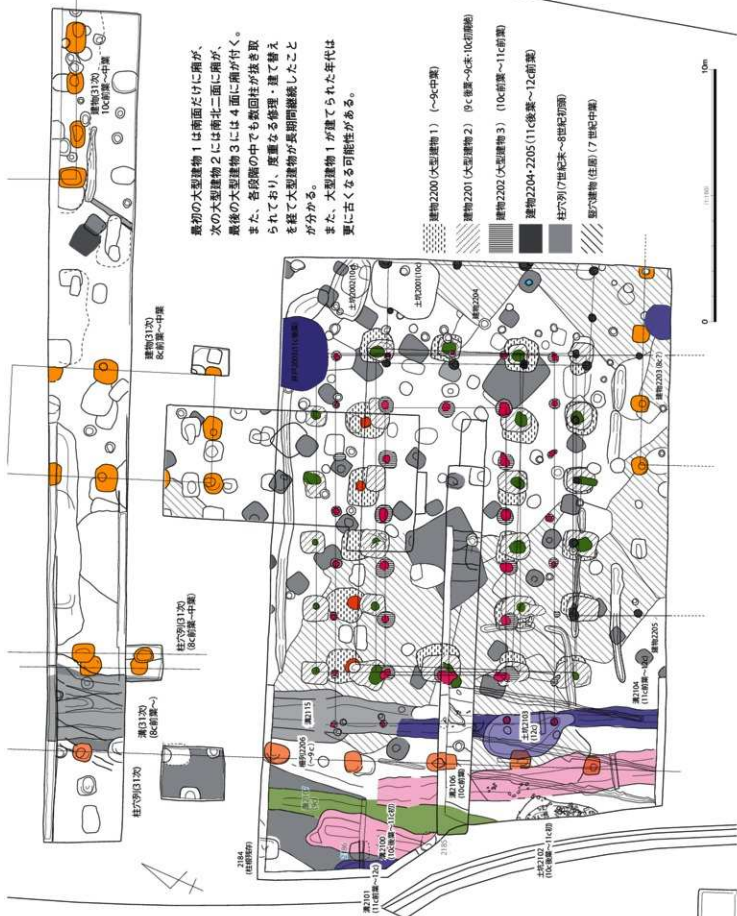


第19図 遺構配置 (奈良時代~平安時代)



最初の大型建物 1 は南面だけに隅が、次の大型建物 2 には南北二面に隅が、最後の大型建物 3 には 4 面に隅が付く。また、各段階の中でも廻り柱が抜き取られており、度重なる修理・建て替えを経て大型建物が長期間継続したことが分かる。

また、大型建物 1 が建てられた年代は更に古くなる可能性がある。



第21図 33-2区遺構平面図





写真 29 大型建物 1～3 西から（奈良～平安時代 約 1,300～1,000 年前）



## Ⅳ 調査研究

### 四国における前半期古墳出土土埴輪の基礎的研究

—香川県今岡古墳出土土埴輪を中心として—

蔵本 晋司

#### 1 はじめに

筆者はかつて、香川県東かがわ市仲戸東道路の調査報告書において、古墳時代後期の埴輪資料を整理する機会に恵まれた。同遺跡出土埴輪を評価するにあたり、当該期を含めた本地域の円筒埴輪の編年的研究のため、未公表資料を含めた埴輪資料の図化作業を実施した。その成果の一部は同報告書に掲載した(蔵本2016)が、諸般の都合で掲載を見送った資料も少なくない。

小稿は、その際実測作業を実施した、当センター所蔵の今岡古墳を中心とした前半期古墳出土の埴輪資料を公表するとともに、埴輪編年Ⅰ～Ⅲ期(埴輪検討会2003)の様相について、若干の考察を加えるものである。同古墳出土の埴輪については、一部が渡部明夫や大久保敏也により既に公表されている(渡部1976・大久保1996)。今回、岡氏が報告された資料を含めて、再度、

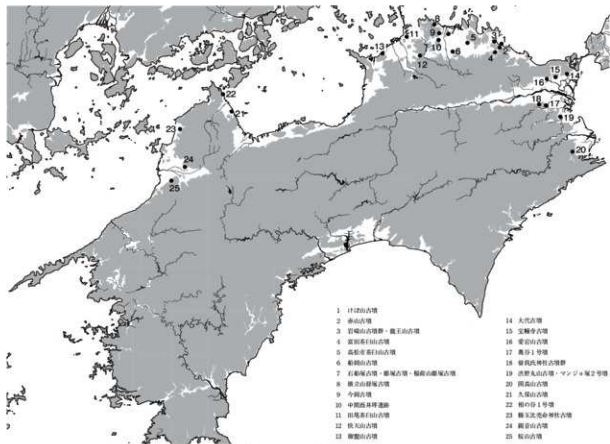
実測・掲載する。これは、取藏資料のなから既報告資料を特定することができなかったこと、図の表現を統一するためであり、非礼があれば深くお詫びしたい。

当センター保管資料は、昭和39(1964)年度に実施した調査時出土資料のほか、その後の採集資料を中心とした資料群である。同古墳出土資料は、そのほか高松市教育委員会保管資料や公益財団法人藤田共済会郷土博物館取藏資料等があり、それらについての図化は今回見送った。また、土製棺資料についても、今回は掲載を見送った。いずれ機会を改めて、報告することとしたい。

#### 2 今岡古墳出土の埴輪

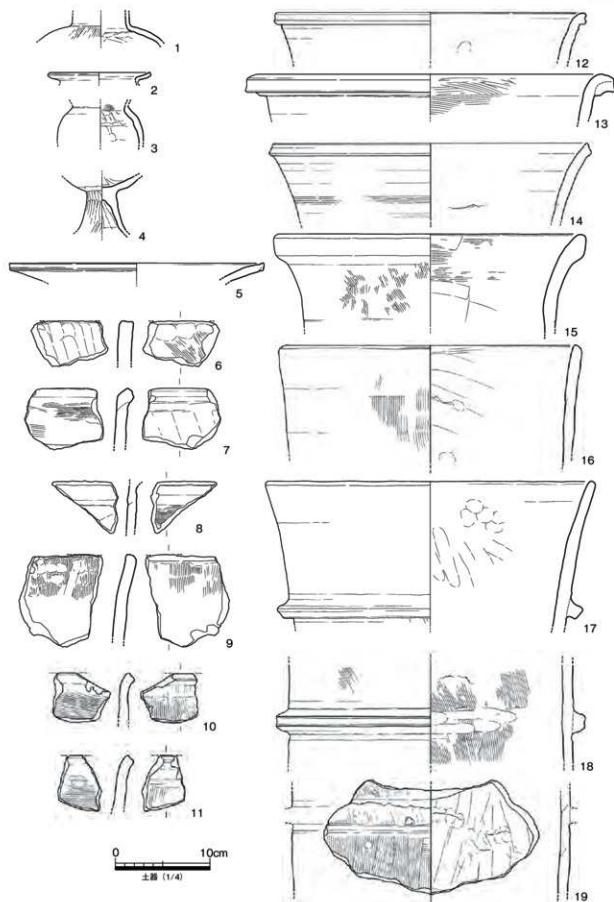
今岡古墳は、高松市鬼無町に所在する全長約60mの前方後円墳である。高松平野北西部の標高約364mの購買山より東に派生する、標高約64m(比高約40m)の舌状丘陵頂部に立地する。前方部や後円部周辺は果樹園として開墾され、昭和39年前方部より土製棺が出土したことから、調査が実施され、現在史跡として保護されている。さらに平成9年度に、高松市教育委員会により、前方部端部より出土した古式土師器甕等の取り上げ調査が実施(香川県教育委員会1999)された以降、本格的な調査は実施されていない。後円部に壑穴式石室と割注式石棺が、前方部に複数基の土製棺の追葬が想定されているが、詳細は不明である。

以下、報告する土器、埴輪は主に採集資料であり、出土位置が不明なものが多い。古くに出土した一部は、高橋邦彦が元所

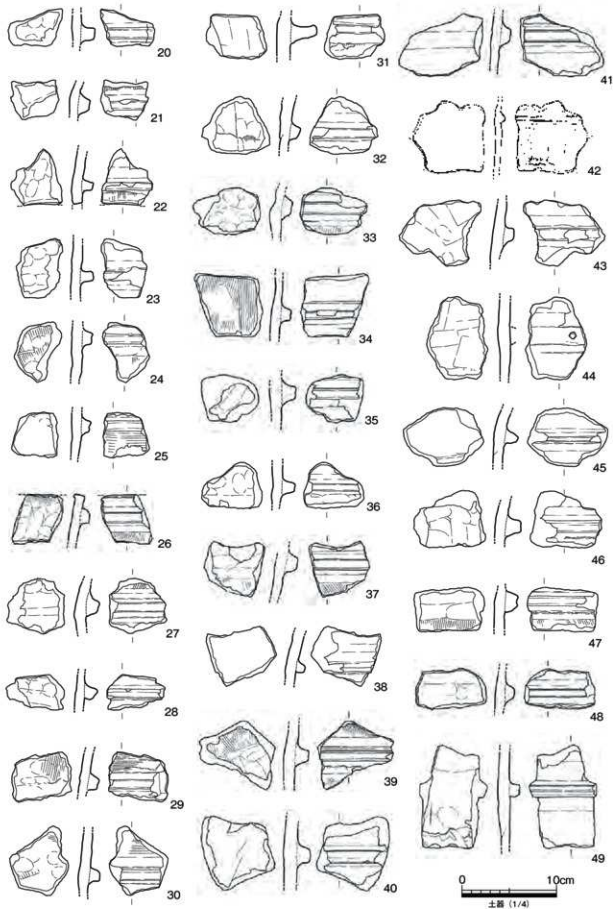


第22図 古墳分布図

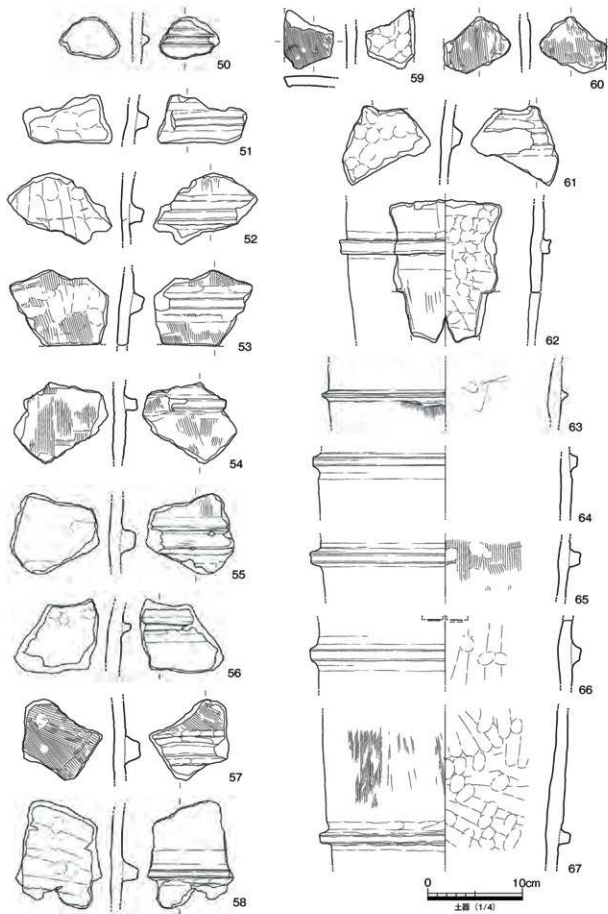
(国土地理院20万分1地勢図「徳島」・「岡山」・「岡山及丸亀」・「高松」・「窪川」・「広島」・「松山」・「宇和島」を12.5%縮小し、一部加工して使用)



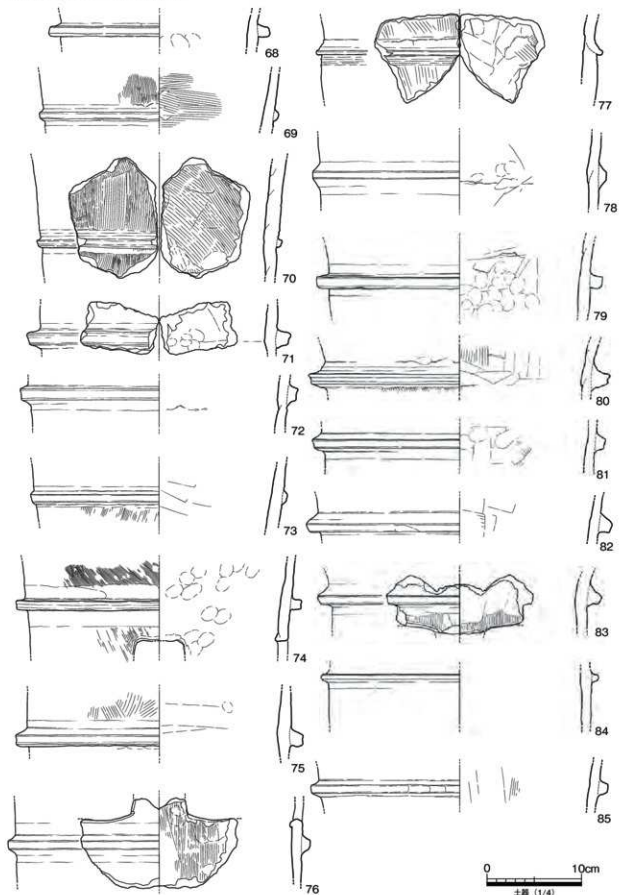
第 23 図 今岡古墳出土土器・円筒埴輪 1



第24図 今岡古墳出土土円筒埴輪2



第 25 図 今岡古墳出土円筒埴輪 3



第26図 今岡古墳出土土円筒埴輪4

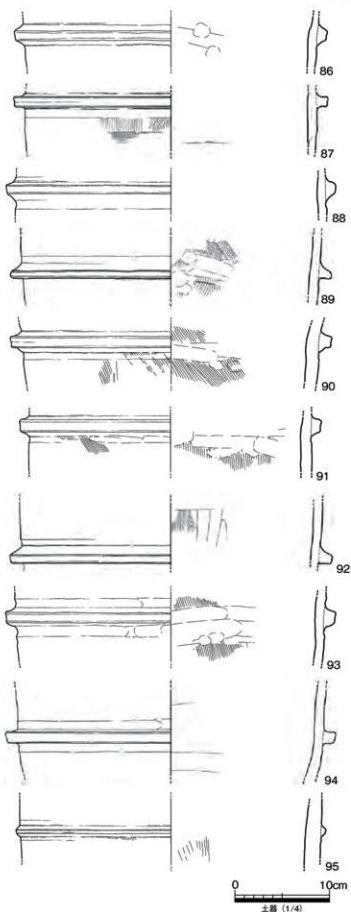
蔵者の高木憲より伝聞した内容をまとめて公表している（高橋1958）。高橋報告文に実測図や写真の掲載がなく、今回掲載した遺物が同一のものかは確認がとれないが、参考までに以下示しておく。

中央よりの後円部東部より出土したものに、土師器高杯、形象埴輪（家・盾・甲冑）がある。家には、樫木4点と寄棟の屋根部分が出土していたようである。樫木は、本報告掲載の196～199と考えてよいだろう。屋根の破片は、形状より201の可能性はあるが、断定はできない。蓋形埴輪は2点の記載があり、1点は後円部の東南、もう1点は前方部のくびれ部の中央やや下より採集されている。後円部出土の1点は、「上部の十字部先端が地表上に露出」とあることから、180か181のどちらかである可能性が高い。また、鳥形埴輪は、昭和六年五月出土として、土製棺とともに写真が掲載されているが、出土位置は不明である。このほか、新形埴輪の記載があるが、現在確認できない。不明な部分が多いが、主要な形象埴輪は、後円部頂部より出土していることが確認できる。

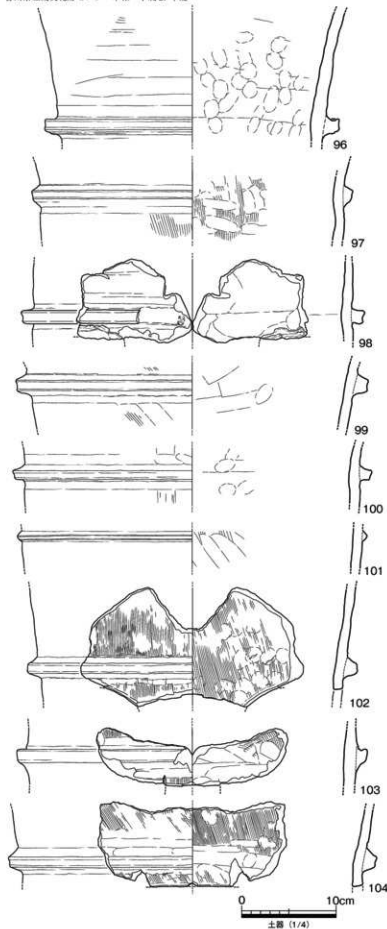
今回、御聖山古墳出土資料等を含め、第2～18図に示すように、227点の土師器、埴輪を掲載した。1～4は、小型供献土器で、1は精製した広口壺、2・3は甕で、2は在地東四国系（蔵本1999）の甕口縁部小片、4は高杯である。5は東四国系壺形埴輪（讃岐系口壺b、蔵本2004）の口縁部小片である。口縁部部の拡張は乏しく、新しい様相を示す。

埴輪には、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪（盾・蓋・甲冑・家・鶏・半甕器台形）がある。色調は明赤褐色を呈し、胎土中に中～粗粒の石英・長石粒を一定量含むものが大半を占める。雲母粒の有無により相違を認めるが、色調やその他の他鉱物等に大差は認められず、円筒・形象を含め、ほぼ同一の窯地粘土を使用して製作された埴輪群である可能性が高い。

6～17は円筒埴輪口縁部、18～104は同胴部、105～128は同底部の破片である。全形が判明する資料はない。口径30.6～39.0cm、底径21.3～30.6cmを測り、小片からの復元値であるため断定は困難だが、S型とM型<sup>(11)</sup>の2規格があった可能性が高い。口縁部高13.6cm1点（17）が確認されたのみで、突帯間隔や底部高は不明。口縁部は、I b・I c・II a・II b・III類がある。点数が乏しく、主体となる形態は特定できないが、III類が含まれる点は留意しておきたい。突帯は、1・2 a・2 b・3 a・3 b・4 c類があり、2 b・3 b類が主体を占めるようだ。1類とした31・63、やや特異な形状の77は、円筒以外の埴輪の可能性が考えられる。突帯設定には、方形刺突技法（19・44・98）が用いられる。透孔は、長方形もしくは三角形（22・26・53・59～62・66・74・76・83・98・102～104）、円形（42）



第27図 今岡古墳出土円筒埴輪5



第28図 今岡古墳出土土円筒埴輪6

が認められ、長方形が主体を占める可能性が高い。また、底部透孔も3点(111・115・127)確認される。外面調整は、1次調整のタテハケと、2次調整として連続的なヨコハケ、ヨコ方向のナデ・板ナデが施され、ヨコハケの出現頻度は高いものではない。内面調整は、ハケ・ナデ・板ナデ調整が施され、ケズリ調整は認めない。

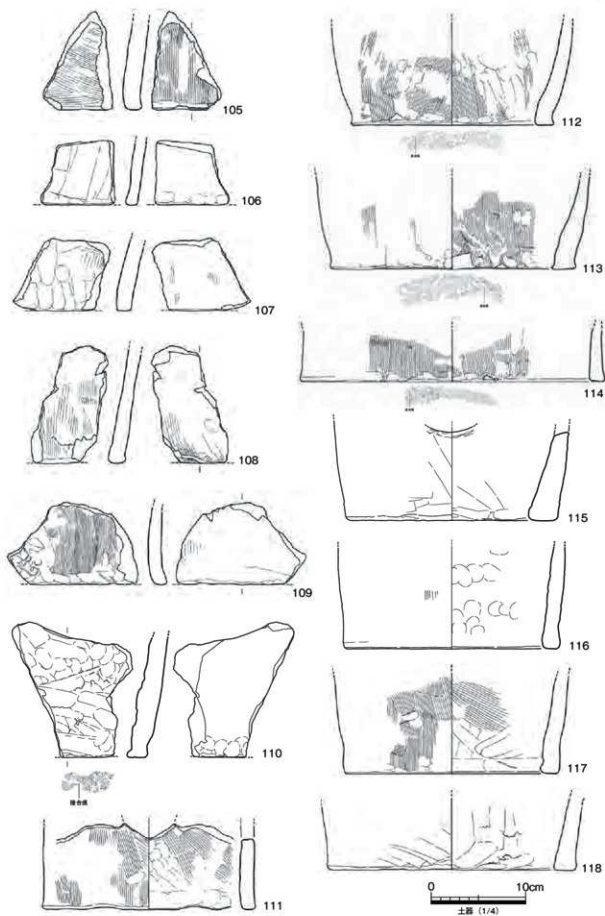
129～137は朝顔形埴輪片である。口縁部はやや外反して、大きく開き、端部は矩形に収める。口頸部の成形は、頸部上端(突帯位置)まで成形した後、一度端面を形成し、その上面に粘土紐を接合して口縁部を成形、最後に突帯の粘土を貼付する。頸基部には、突帯を貼付する135と、それを欠く136の2者がある。

138～154は、盾形埴輪とした。形象部表面を、ハケやナデ調整により平滑に整えた後線刻を施し、横断面が曲線を描き、端部が矩形となるものを盾形埴輪として報告する。しかし、小片の資料には、円筒埴輪や後述する家形埴輪が含まれる可能性は否定できない。

盾面は、綾杉文の外側に鋸歯文による外区を有する可能性のある150と、内・外区の区別のないものの2者がある。前者は中間西井坪遺跡に類例が見出せ、おそらくは岡山県金蔵山古墳に近似する、1類と2類の両者の特徴を共有する(高橋1988)盾形埴輪の可能性が高い。後者は、138・147・148・149・152・154のように、周縁に綾杉文を配するものと、139・143・144のように、単線もしくは複線による圏線を巡らせるのもの2者がある。綾杉文や圏線内部は、破片資料のみであるため詳細は不明だが、単線の直線により内部を数区画に区分し、それぞれの区画内部には、斜線文を充填した角状の区画文(152・154)や、直線と弧線を交互に配した直弧文状の文様(151・153)が、それぞれランダムに配されていたようだ。

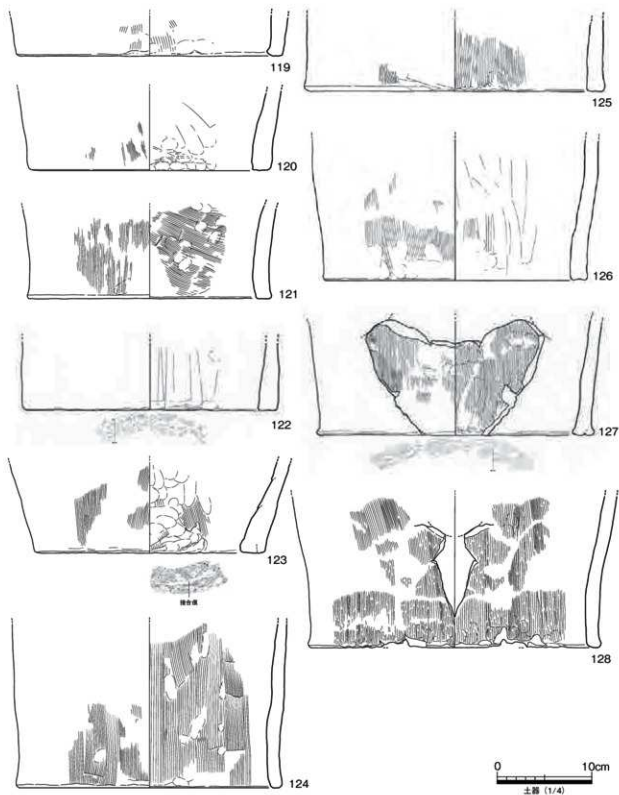
内区文様が鋸歯文や菱形文、格子文といった幾何学的な文様を使用しない点で、複線によるS字状の文様を連ねる徳島県大代古墳例(※2)や、スジ貝を表現したとされる金蔵山古墳例、鋸歯状の区画内部を綾杉状の斜線で埋めた奈良県小阪里中遺跡第4次調査出土の資料(田原本町教育委員会2007)等に共通する意匠は認めるが、相違する点も多く、類似資料は管見では捕捉していない。

155～193は、蓋形埴輪である。小栗氏



第29図 今岡古墳出土土円筒埴輪7





第30図 今岡古墳出土土円筒埴輪8

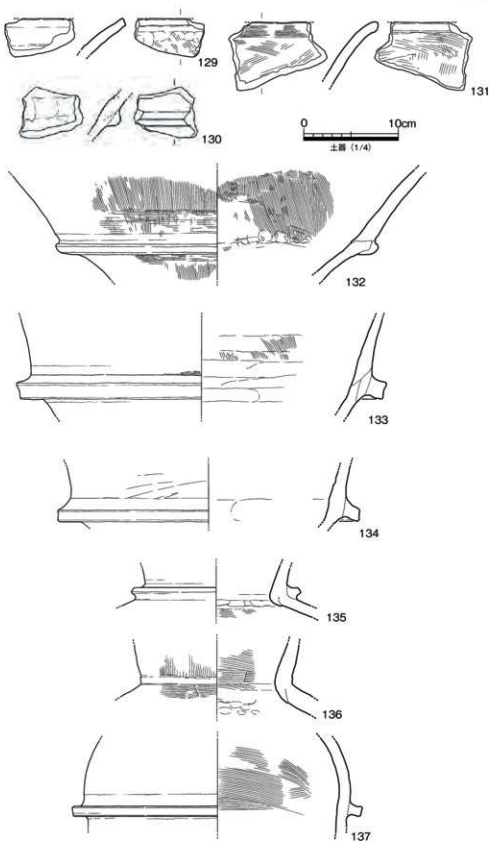
の有立無肋木式（小栗2007、以下、蓋形埴輪各部の分類は小栗氏の分類案を用いる。）に分類され、後述する特徴より、同氏編年の2段階に位置付けるのが妥当であろう。155～179は立ち飾り部の飾り板の小片である。飾り板頂部は直線的で、外

側縁は縦に短く、中央部には172～175等より矩形の透孔が穿たれるようだ。また透孔と外縁部の位置関係より、上下に2個の透孔が付されていた可能性が考えられる。飾り板は、単線で輪郭を線取る155・157・169等と、複線で線取る173～175等

の2者があり、また鑄部には線刻を認めない。小片のため、断定はできないが、「用形文」a 4文様を基調とし、それに透孔を付加したものと考える。以上の特徴より、立ち飾り部Ⅱb型式に分類される。

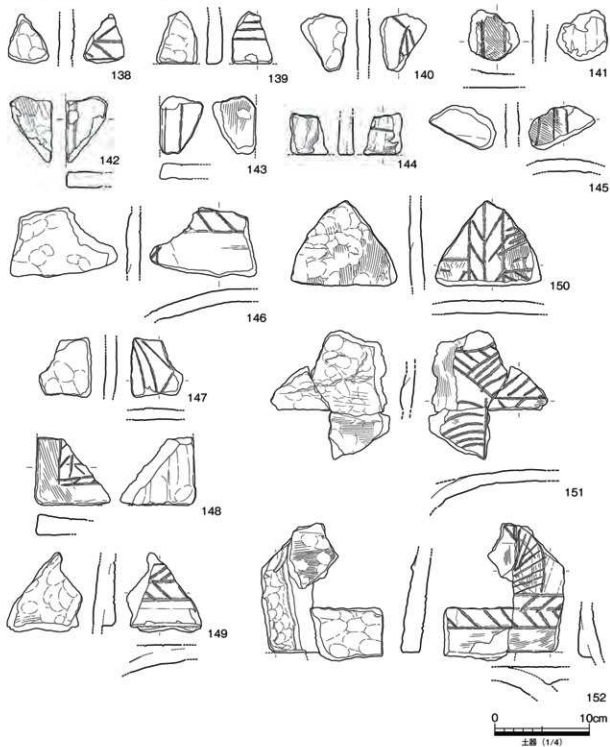
180・181は、立ち飾り部の飾り板上半部を欠く破片である。ほぼ同形、同意匠の破片で、飾り板には、いずれも複線による線刻を認める。円筒形の軸部は粘土紐を巻き上げて成形し、上端に円環状の飾り板受け部粘土を接合する。飾り板受け部は、板状を呈し、受け口状とならない点に特徴を認める。その上面に飾り板を接合するのだが、その接合痕より、4枚の板材をそれぞれ十字形に貼り合わせたのではなく、1枚の大きな板状粘土をまず接合し、それに直交するように2枚の粘土板を接合して成形している。飾り板、同受部、軸部に、荷重による歪みはほとんど認められないことから、各部接合後に一定の乾燥を経て、次の工程がおこなった可能性が考えられる。また、鑄の成形や透孔の穿孔、線刻も、乾燥後に施されたと考える。

182～194は、軸受部～笠部の小片である。軸受部上端は突帯を貼付して肥厚し、古い様相を有する。軸受部下端突帯は、主に笠部に幅広の突帯を貼付する。笠部は中位に突帯を有し、下半部に単線による布張り表現を施す191と、無文の192～194がある。



第31図 今岡古墳出土朝顔形埴輪

笠部端は矩形に収める、単純端部である。笠部は日類に分類されるが、小片のため細別は困難である。



第 32 図 今岡古墳出土土器形埴輪 1

195は、甲冑形埴輪草摺の小片と考える。縦やかに外反して開き、端部は矩形に収める。外面は、3条1組の沈線を縦に一定の間隔で配して区分し、その間を6条以上の横方向の平行沈線で充填する。革製草摺の刺繍を表現したとされる鋸歯文等の装飾を認めず、鉄製草摺を模した可能性も考えられる。施文は単純化しており、1類2式か2類（高橋1988）に分類されよう。

196～212は、家形埴輪である。202・204・205は、小片

のため他の器種となる可能性も残る。196～199は堅魚木である。いずれも中央部がやや細く、両端部が縦やかに肥厚する鼓状を呈しており、端面中央には径2～4mmの円形の刺突を施す。199のみ他より若干大きく、規模の異なる2種の建物の種を飾っていた可能性も考えられる。200・201は壘体上部と屋根部の破片である。200は軒の出が乏しく、屋根が急傾斜で、妻部とみられる左端部の形状より切妻造であった可能性が、201は道

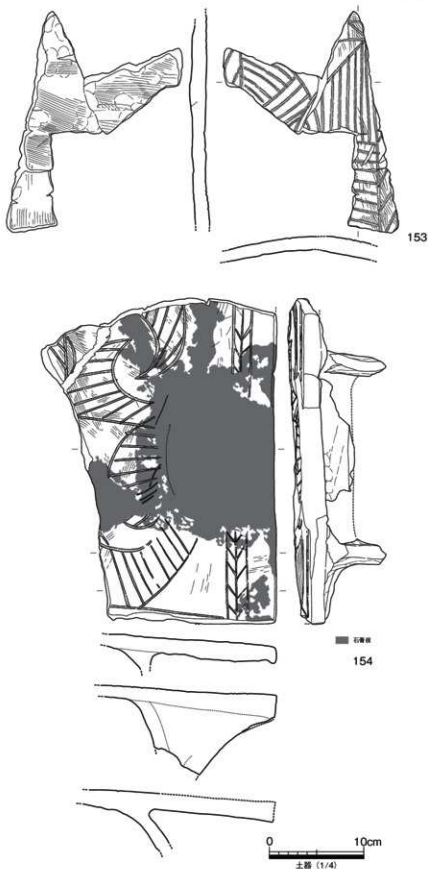
に屋根の傾斜が緩やかで、寄棟か入母屋造の可能性がそれぞれ考えられ、屋根形状の異なる複数の建物が用意されていた可能性が考えられる。いずれも屋根と壁体との接合は、青柳氏の分類の①の手法による(青柳1995)。

柱の表現は200・201・206・211で確認され、いずれも壁体に厚さ約5mmの粘土を貼付した角柱形である。しかし、窓か入口とみられる端部に梯子状の彫刻を有する202が家形埴輪だとすると、刺線形が含まれる可能性がある。

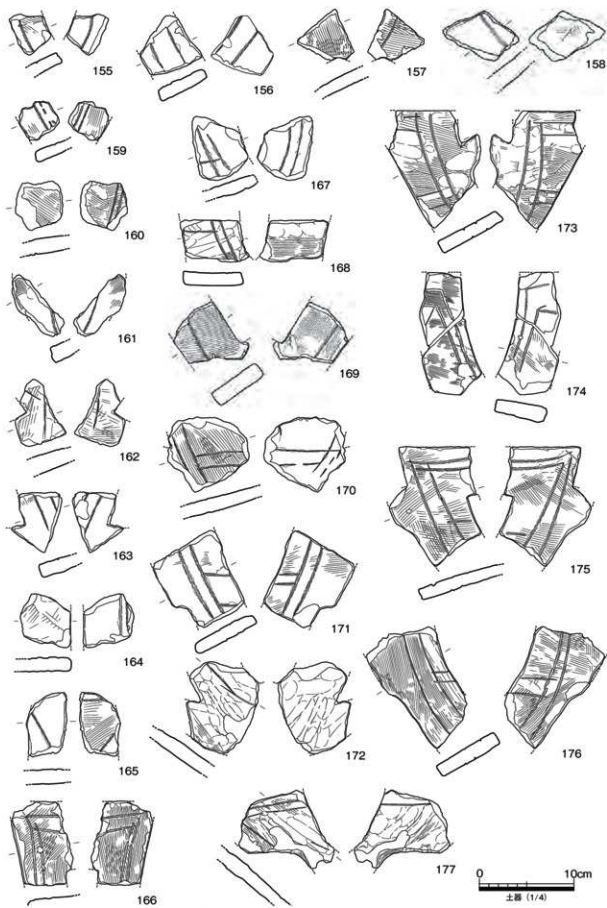
窓は200・202・204・207・211で確認され、いずれも矩形である。211では、窓の上端と下端にそれぞれ柱を貫いて平行線が引かれ、柱部では複線となっている。おそらく長押を表現したものと思われる。

205～212は、基部及び裾廻り突帯の破片の可能性を考え固化した。205・212の外側、裾廻り突帯の剥離部には、凹線技法が観察される。裾廻り突帯には、断面形がI型となるもの(206・207)と、L字形となるもの(208～211)の2者を認める。212の基部は、他の3例(205・206・211)と比してやや高く、下部部に矩形の切り込みを認める。

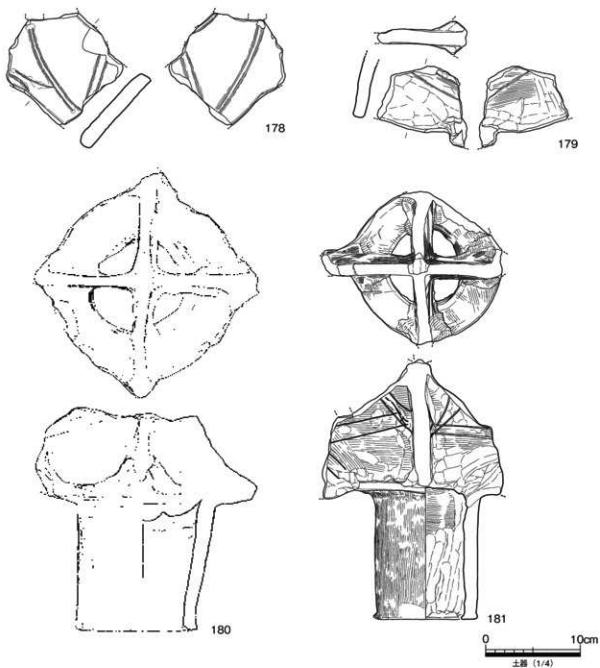
213～216は、半裁器台形埴輪と考え図示した。本地域では、本墳以外には中間西井坪遺跡(香川県教育委員会1996)以外で出土例は報告されておらず、中間西井坪遺跡が本墳の埴輪生産遺跡であったという指摘(大久保1996)と矛盾しない。また、本埴輪が実際に古墳で使用されていたことを実証する点でも重要であろう。具体的な使用方法は不明で、今後の調査により原位置を保つ資料の出土に期待したい。213は、緩やかに外反して開く形状より、本器種に含め図示したが、幅広の矩形の透孔を穿つ例は中間西井坪遺跡にはなく、他の器種となる可能性も考えられる。



第33図 今岡古墳出土土厩形埴輪2



第34図 今岡古墳出土土蓋形埴輪1



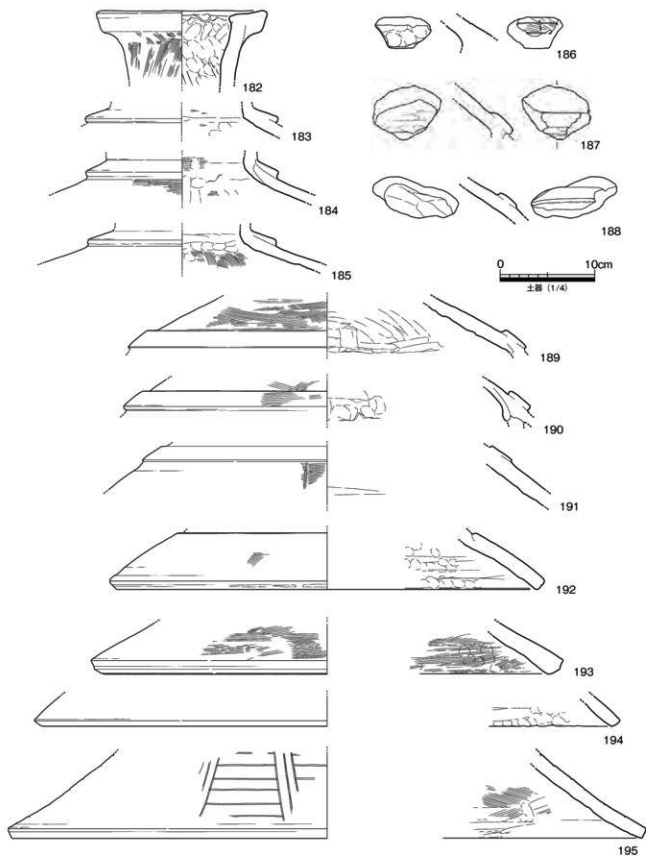
第35図 今岡古墳出土蓋形埴輪2

217は、鳥形埴輪の脚部片で、長径6.5cm、短径6.2cmの円筒形の止まり木に据まった右脚部の小片である。第2～4趾は止まり木前面に板状の粘土を被せて、3条の線刻により表現し、第1趾は裏面に柱状の粘土を貼付する。第2趾は、第3・4趾と比べて幅が狭く表現される。宮内庁所蔵の大阪府太田茶臼山古墳出土の鶏形埴輪にみられるように、幅の広く表現された第3・4趾より、水掻きの可能性も考えられるが、断定はできない。鶏の可能性も考慮して、鳥形埴輪として報告しておく。今後の調査により頭部等が出土すれば、判断できると考える。なお止まり木下端には、円筒部に貼付された幅約2cmの突帯の一部が残存する。なお残存する突帯より、円筒部は径39cm前後に復元

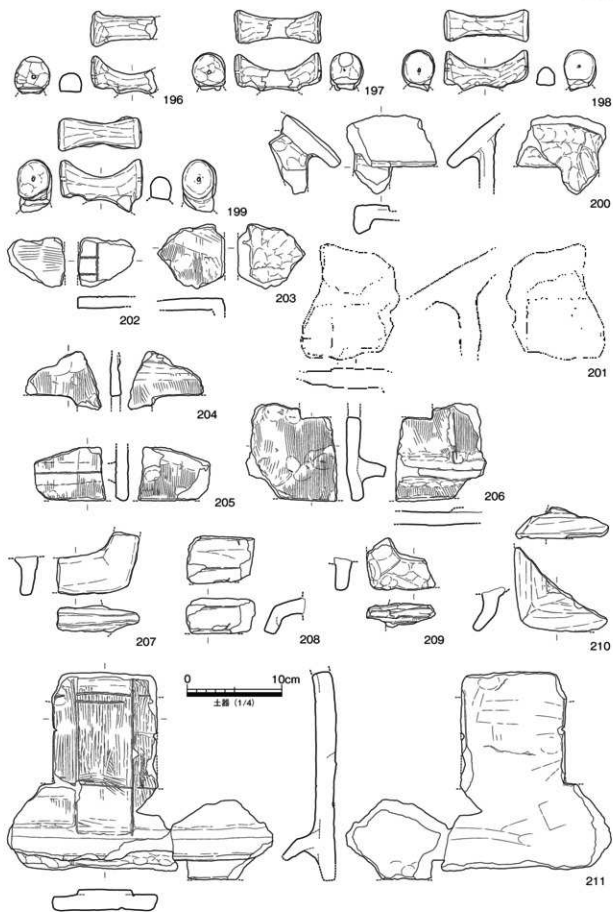
される。

一方奈良県橿原向道跡坂田地区出土の鶏形埴輪では、各趾は立体的に表現され、古式の様相を示す。その後、本例のような各趾を線刻で表現するものを経て、趾の表現が欠くものや、脚部全体を線刻で表現するものへと、大きくは変遷するとみられる。

218～221は、器種不詳の形象埴輪である。221は、幅3cm程の粘土紐を積み上げて半球状の器体を成形し、その外面側に厚さ1cmほどの粘土板を貼付する。外面はハケ調整により基面を整えた後、単線による沈線で方格を刻み、右図下端に低い矩形の突帯を配し、右端にも同様の突帯で区画していた可能性がある。粘土板は器体全面を覆うわけではなく、図左端は矩形に

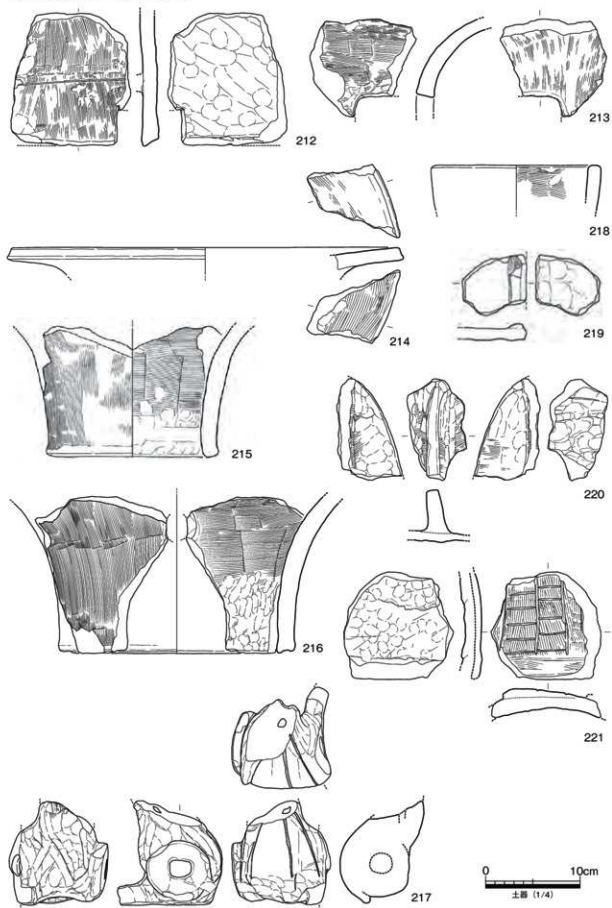


第36図 今岡古墳出土蓋形埴輪3・甲冑形埴輪

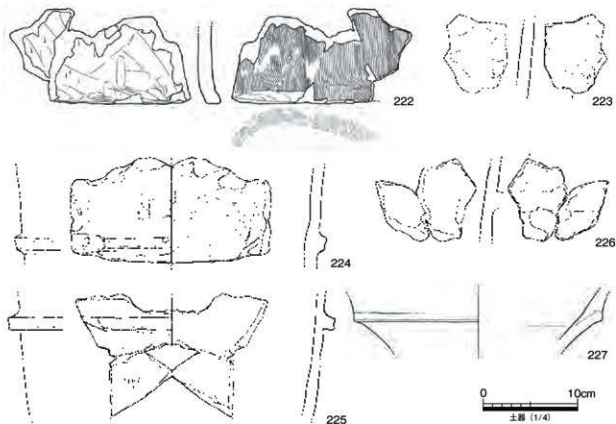


第37図 今岡古墳出土土家形埴輪 1





第38図 今岡古墳出土家形埴輪2・半截器台形埴輪・鳥形埴輪・不明形象埴輪



第39図 出土地不明の円筒埴輪・朝顔形埴輪

切り離して、器体とは面を違えるように立体的に成形される。甲冑形埴輪の可能性も考えたが、小片のため部位を特定できず、不明埴輪として報告しておく。

第37図は、当センター所蔵資料のうち、古墳時代前半期に位置付けることが可能な埴輪資料を図示した。222は、御聖山古墳出土資料とされる円筒埴輪の底部片である。胎土中に角閃石や雲母細粒を一定量含み、同種胎土を有する埴輪は、本地域では石清尾山古墳群と横立山経塚古墳等、高松平野中・西部の古墳からしか出土が知られていない。本資料も、これら地域の出土資料が混在した可能性が考えられる。224は岩崎山4号墳出土とされる円筒埴輪である。突帯が剥離した胴部には、方形刺突痕が認められ、内外面の調整や突帯形状からも、岩崎山4号墳出土資料と考えて矛盾はない。225は出土古墳不明資料であるが、胎土は222と近似しており、高松平野中・西部の古墳出土資料と考えられる。223は赤山古墳出土とされる円筒埴輪の小片である。226は三ツ池出土とされる円筒埴輪胴部片である。突帯剥離跡には、凹線技法が確認される。227は、津頭東古墳出土とされる壺形埴輪の口縁部の小片である。

### 3. 四国地域における前半期古墳の埴輪編年

以下では、四国地域における古墳時代前半期の円筒埴輪を中心に、その編年上の検討を行うこととした<sup>33)</sup>。今回検討する資料は、有黒斑の円筒埴輪であり、川西編年1～3期を中心とし、一部4期の埴輪も含む(川西1988)。

当該時期の円筒埴輪については、近年の調査により資料が増加してきたが、全体形状が判明する資料はごく一部に限られる。したがって、以下に検討した編年の位置関係は、今後の良好な資料の出土により、変更される可能性があり、今後の課題としておきたい。また、各期各段階の編年の指標は、埴輪検討会による畿内編年(埴輪検討会2003)を採用することとし、可能な限り西地域の埴輪の属性をすり合わせることで、併行関係の追究に配慮したものである。方法論として課題のあることは承知しているが、埴輪の製作や加飾に係る技術的な手法が、畿内において生み出され、地方に専ら拡散していくものであることを考えれば、試論として提出することは許容されるのではないかとと思う。

#### I期1～2段階

本期には、器台系埴輪は本地域には導入されず、壺形埴輪単独による墳丘儀礼がなされた段階である。本地域の壺形埴輪については、かつて考えをまとめたことがあり(蔵本2004・2008)、その後、柴田昌司(2015)や栗林誠治(栗林2015)、信里芳紀(信里2014)、松本和彦(松本2010・2015)等により、研究が進められている<sup>34)</sup>。壺形埴輪については、それら研究を参照された。ここでは、器台系埴輪の導入が、畿内や播磨、備前、備中地域と比して大きく遅れ、そこに相対的な階層表現の可能性が潜在することを指摘しておきたい。

## I期3段階

前段階以来の壘形埴輪単独による墳丘祭祀は継続される<sup>(25)</sup>。一方、本期においてはじめて、器台系埴輪が墳長約45mのやや特異な積石塚前方後円墳である香川県船岡山古墳（高松市教育委員会2009・2010・2013）において導入される。大きな画面を本段階に設定することができる。

船岡山古墳の埴輪については、報告書が未刊のため、詳細は明らかではない。破片資料で全形が復元されたものはないようであり、3条突帯で、突帯間隔17cm前後、底部高23.5cm前後のものがある。外面はタテハケ、内面はケズリ調整され、巴形の透孔が確認される。

船岡山古墳の埴輪については、その形態的特徴から、次段階の高松市茶臼山古墳へ系譜が継続することが指摘されてきた（松本2010・大久保2013・信里2014）。私もこの考えを支持したい。ここで問題となるのが、この系譜がどこに連れるかなのだが、筆者は以前、後出する高松市茶臼山古墳の埴輪を整理した際に、大阪府將軍山古墳の器台系埴輪に求めると想定した。しかし、これについては口縁部下半の形態に相違が大きく、撤回したい。突帯間隔の設定に刺突技法が用いられていることや、何より器台形状を呈することから、その系譜が畿内地域に求められることは間違いないだろう。

船岡山古墳資料では、受口状口縁部の下半、最上位突帯との間は、ふくらみを有しつつも内傾した、高さ4cm程の立ち上がり部を認める。この部分の内外面の調整は、胴部と同様にハケとケズリが施され、最上位突帯より上位にあることから口縁部に含め考えたが、ヨコナテ調整がなされる口縁部とは別の部位として製作されたことは明らかであろう。結論から言えば、この部分は朝顔形埴輪の体部を意識したものであると思われる。頸基部が強く括れることも、矛盾するものではない。しかし一方で、頸基部の突帯を欠き、明確な頸部も造作しない点で、器台系埴輪との親縁性も認められる。

つまり、船岡山古墳の埴輪は、器台系埴輪に朝顔形埴輪の要素を付加して成立したものと評価したい。頸基部突帯の欠落は、在地系譜の二重口縁室をモチーフとした可能性に求められよう。奈良県東殿塚古墳や同鴨部波古墳群埴輪にみられる器台系埴輪と朝顔形埴輪を、一定度の製作技術を習熟した工人が、一体としてアレンジして成立したのが、本埴輪ではなかろうかと想像する。現状では畿内地域に直接的な系譜関係は見出し得ず、モチーフや製作技術は畿内地域に淵源を求められるものの、それらに精通した在地の工人による製作の可能性が想定される。

## I期4段階

器台系埴輪は、これまで明らかになってきたように高松市茶臼山古墳（蔵本2007、香川県教育委員会2014）のみが知られ、壘形埴輪単独による儀礼も継続<sup>(26)</sup>する。調査の進展による資料の増加の可能性はあるものの、こうした状況が大きく変化するとは思われない。

高松市茶臼山古墳は、小片のみで全体形状は不詳ながら、受口状口縁を有する朝顔形埴輪が前方部を中心に複数個体供献さ

れていた（蔵本2007、香川県教育委員会2014）。既述したように、前段階の船岡山古墳の埴輪の系譜に直接繋がりが、継続して在地での受容が確認されたことは重要であろう。しかし、同種の埴輪は現状では2基のみで、後継はせず、周辺の同時期の埴輪儀礼に影響を及ぼした可能性は認めない。

## I期5段階

本期に至り、ようやく定型化した円筒埴輪が本地域に導入される。つまり、快天山古墳（綾歌町教育委員会2002・2004）と赤山古墳（さぬき市教育委員会2013）出土埴輪がそれであり、本地域の埴輪祭祀の大きな画面を、本段階に求めよう。快天山古墳にみられる3段階のテラス面の整備は、こうした円筒埴輪導入の前提となるものと考える。また、愛媛県相の谷古墳出土資料（愛媛県歴史文化博物館2007）も、本時期に位置付けられる可能性がある。こうした断片的な分布（第20図）には、特殊な事情があった可能性が予想される。

上記3基の古墳は、いずれも前方後円墳で、とくに快天山古墳は墳長約100mの当該期としては四国最大規模である。また、快天山古墳の埋葬施設には、鷲ノ山産の削り抜き式石棺が、赤山古墳には火山産の石棺がそれぞれ用いられ、前者は大阪府玉手山古墳群周辺に、後者は奈良県佐紀磯山古墳への石棺や石材の搬出が確認され、そうした石棺等の搬出を通じた畿内勢力との関係において、埴輪が導入された経緯が説明されてきた。

また、快天山古墳では在地系譜の壘形埴輪が出土し、新たに導入された円筒埴輪祭祀に、在地系譜の壘形埴輪祭祀が併存していることが確認される。一方で、壘形埴輪祭祀のみを執り行った古墳も存在<sup>(27)</sup>し、円筒埴輪供献の有無による階層化がより一層顕在化する。そうした在地での階層化の背景には、円筒埴輪祭祀を介した畿内地域の集団との連携といった、政治的な関係として理解される可能性もつ。

快天山古墳の円筒埴輪は、大阪府御旅山古墳や同玉手山1号墳の円筒埴輪と、形態的特徴が類似することが指摘される（廣瀬2010・松本2010）できた。この点は重要で、おそらくは畿内の埴輪工人が直接、同墳の埴輪生産に関与した可能性を考える根拠となる。また、上記した3基の古墳の埴輪の内容はそれぞれ相違し、畿内の形象埴輪を含めた埴輪の一様式パッケージ化されて各地へと伝播したのではなく、それぞれの古墳の被葬者と畿内の集団との個別の結びつきのなかで、各々個別に埴輪が導入されたことを示している。

しかし、そうした埴輪の系譜関係を、直接時間的關係に置き換えることは困難なようである。今回、快天山古墳出土資料を詳細に観察した結果、後述するように御旅山古墳や玉手山1号墳よりやや後出する可能性が考えられるに至り、当該期の資料として位置付けられると考えた。しかし、全形が判明する資料はなく、公表された資料も一部にとどまるため、今後資料の整理が進めば、時期が遡る可能性も否定できず、今後の課題としておきたい。

快天山古墳の円筒埴輪は、口径32～45cm、底径24～42cmをそれぞれ測り、底径からはL型の資料も含まれる可能性はあ

るが、小片からの復元値でもあり、断定はできない。M型の資料が大半を占めると考える。口縁部はほぼⅡa類に限られ、肩部形状に若干の個体差を認める。突帯は1・2 a・3 a類があり、突帯高は1.0cmを超える高いものが多い。突帯間隔の設定には、刺突技法が確認される。外面調整はタテハケで、口縁部にヨコナデを加えるものが多い。内面調整は、口縁部にヨコハケを、胴部はケズリ調整が卓越し、ナデやハケ調整を施すものもある。底部は、ハケやナデ調整がやや多数を占める可能性がある。透孔は、口縁部と底部を除く胴部各段に穿たれている可能性が高く、方形が主体を占めるようであり、三角形や円ないし半円形を認める。各段の穿孔数は、4孔を基本として5孔も一定数認める(松本2010)。

各部位の割付は、口縁部高は4.0cm前後、5.2cm前後、6.4cm前後、7.2cm前後、8.0cm前後、9.2cm前後とややばらつき、個体数が乏しいため、現状ではこの中から一定のまとまりを設定することが困難である。突帯間隔は12.5cm前後と、14.5cm前後、16.0cmの概ね3規格にまとまるようである。底部高は19.2cmのものが1点のみみられる。口縁部高が4cmの個体は、胴部最上段の突帯間隔が、14.5～15.0cmの間に納まる可能性が高く、その和は18.5～19.0cmと、口縁部高9.2cm前後の2倍で、底部高19.2cmに近い。このことは鎌方氏が、「Ⅱ期の割付方式との関連性を看取できる」とする(鎌方2003)奈良県新山古墳周辺埴輪棺例に倣ったものである可能性があり、この点を重視して本段階に位置付ける。透孔に円形ないし半円形が含まれることも、その可能性を示唆するものと思われる。

赤山古墳は、円筒埴輪のみ出土している。いずれも小片のため、全形、口縁部高、突帯間隔等は不明である。底径は22.4cmのS型と、胴部径34.6cmのM型の2規格があるが、小片のため規格の不明な資料が大半を占める。突帯は、突帯高1.1～1.6cmの2 a類が主体を占め、1類が少数含まれる。突帯間隔の設定には、方形刺突が採用される。透孔は、方形、三角形、凸形が認められ、円形は含まれない可能性が高い。小片のため、三角形なのか方形なのか判断できない資料が多い。外面調整は、タテハケが主体を占め、1点のみA種ヨコハケ調整を認める。内面は、ケズリ調整が主体で、ハケ調整が少数含まれる。

資料の内容から、断定のことは避けたが、C a種ヨコハケの不在、突帯間隔の設定での凹線技法の不在、突帯が後述する岩崎山4号墳資料と比してやや古相を呈すること、透孔に円形のもの認められないことより、岩崎山4号墳資料よりは先行する可能性が高く、本期に位置付けた。今後の資料の増加を持って、検証する必要がある。また、報告書でも触れられているように、両古墳間には凸形透孔の共有等、埴輪生産に同一系譜の工人集団が関与した可能性が高く、おそらくは畿内集団が、津田湾周辺の古墳の築造に際して、継続的に技術的支援を行っていた可能性が高いと考えられる。

相の谷1号墳は、円筒埴輪と朝顔形埴輪が出土している。伏天山古墳同様、口縁部高4～5cmの短小口縁のものを認める。突帯間隔、底部高は不明。突帯は1類ないし3 a類があり、突

出度の高いものが多い。外面調整は、タテ・ナメハケとヨコハケがあり、後者の頻度が高い点にやや後出する要素を認める。内面調整は、ハケとケズリ調整がある。透孔は方形に限られるようだ。また、胴部外面に縄文文等の線刻を有するものも多く認められる。

朝顔形埴輪は、壺体部と円筒部の接合部の突帯が受口状を呈するとみられ、奈良県東塚塚古墳出土例との系譜が想定されている(山内2007 b)。時間的にややギャップがあり、直接的な系譜は想定できないだろう。本墳の朝顔形埴輪については、兵庫県龍子三ツ塚1号墳や東四国系変形埴輪、大分県鬼塚古墳との関係についてかつて指摘した(蔵本2012 b)。

相の谷1号墳出土資料は、朝顔形埴輪に古相を認めるものの、内外面の調整手法より、本期でもより新しい傾向を有するものと考えたい。

また、これら古墳のほかに、香川県御堂山古墳(香川県教育委員会1989・大久保1996)や阿鴨部不明墳(大久保1996)出土の円筒埴輪は、資料数が限られるものの、内面にケズリ調整が施される点から、当該期か、次段階の可能性が高い。これらの古墳については、資料の増加を待って判断したい。

上記したように、当該期を含めた前半期の器台系埴輪の導入は、個別早発的で断片的である。津田湾沿岸部の古墳群等一部を除いて、同一地域に継続して導入されないという大きな特徴を認めることができる。おそらくは当該時期までの前方後円墳を中心とした被葬者が、個別に畿内地域の集団と関係を有していたことを反映するものと考えたい。

## Ⅱ期1段階

有黒斑の野焼き焼成で、外面調整後にB種ヨコハケへと発展する、ストロークが長く静止痕のない連続的なヨコハケ(以下、C a種ヨコハケと呼称。鎌方1997)の出現を指標とする。香川県岩崎山4号墳(さぬき市教育委員会2013)を標識資料とし、徳島県愛宕山古墳(北條2003)や愛媛県久保山古墳(正岡2003)も本期の可能性を考える。

岩崎山4号墳は、円筒埴輪、朝顔形埴輪のほかに、形象埴輪として家形埴輪や盾もしくは甲冑形埴輪がある。円筒埴輪の口径の計測値には、大きなバラツキが認められる。すべて破片資料であり、計測誤差も含まれようが、概ねM型(口径31cm前後)と36cm前後、底径24cm前後)、L型(口径45cm前後)の2規格3類に分類可能と思われる。口縁部高は、L型の1点に10.8cm前後と高いものがあるが、それ以外は6.0cm前後と6.7cm前後の2規格が主体を占めるようである。突帯間隔は、胴部最上段の1点のみ19.4cmを計測する。これは胴部最上段の突帯間隔を高く設定する奈良県新山古墳等の系譜に連なるもので、おそらくこの高さで各段が割り付けられていたのではないと思われる。したがって突帯間隔は不明で、底部高もまた不明であり、全体的な割付方式は復元できない。

口縁部はⅡ a類のみが認められ、肩部調整に若干の相違をみせる。突帯は2類ないし3類が主体を占め、突帯高は0.8～1.4cmと一定の高さを維持している。突帯間隔の設定には、刺突技法とともに凹線技法が認められ、前者が主体となるものの、円

線技法が本期には導入されていることを示している。透孔は、方形、三角形、凸形、円形ないし半円形が確認され、三角形が主体となるようである。個数は残存部から判断して、口縁部と底部を除く各段にそれぞれ2孔が穿たれていたと考えられる。外面調整は、タテハケ調整が一定数認められるものの、Ca種ヨコハケの出現率も高い。一定度の定着をみていると評価してよいだろう。内面は、ケズリ調整が卓越し、口縁部や胴部最上段付近はハケやナデ調整によりケズリ痕が消される。なお少数だが、Ⅱ期の蝋付埴輪や楕円筒埴輪を伴う。蝋幅は8cm以上を測り、本期の特徴を示す。

愛宕山古墳は、平成5・13年度に北條淳彦により、墳丘測量と石室実測調査が実施され、その際に少量の円筒埴輪と朝顔形埴輪、壺形埴輪とみられる小片が採集されている(北條2003)。円筒埴輪は、口縁部と胴部の小片のみで、全形は不明。口径32cm前後、口縁部高60cm前後のM型1点が確認される。口縁部は、受口状に内湾する単口縁形のもの1点がある。突帯は、2a類と3b類があり、前者が多数を占めるようである。突帯間隔の設定技法は不明。透孔は、確認される数点はいずれも方形とみられる。外面調整は、口縁部はナデ調整され、胴部はタテハケのものとの連続的なヨコハケを加えるもの2者があり、前者がやや多い。また、外面に赤彩を施す例もみられる。内面は、口縁部はヨコハケ、胴部はナデとケズリ調整が認められ、やや前者が多いとみられる。なお、壺形埴輪の胴部片とみられる小片には、結晶片岩粒が確認された。

突帯間隔や底部高等不明な点が多くあり、时期的な位置付けは苦慮するが、内外面の調整や突帯、透孔の形状より、本段階か次段階の資料の可能性を想定しておく。

## Ⅱ期2段階

本段階も良好な資料を欠き、断片的ながら横立山塚古墳(高松市教育委員会1991・2000)、奥谷1号墳(2003)を標識古墳として、香川県田尾茶臼山古墳(2009)と愛媛県板山古墳(山内2007a)は、本期かⅢ期1段階に下る可能性を考える。後述するように、B種ヨコハケを欠落すること、内面はナデ調整が卓越すること、透孔が円形に統一されていないこと、突帯形状等を指標に、本段階の時期設定の根拠とした。

横立山塚古墳資料は、小片が多く、全形は不明である。口径約40cm、底径約30cmのM型のみ認める。突帯間隔は1点のみ約18cmを測る。底部高、口縁部高は不明。口縁部はⅡa類のみがあり、端部形状に若干の差を認める。突帯は3b類が主体を占め、2b類を少数認める。突帯高は、0.7~1.2cmを測る。外面調整はタテハケが主体を占め、一部にCa種ヨコハケないしA種ヨコハケを認める。また少数ヨコナデ調整により1次調整を消すもの(高松市教育委員会2000報告資料11-14)があり、次段階の今岡古墳資料に盛行する。本資料では、ヨコハケの出現頻度は低調で、この点で本資料の时期的な位置付けに躊躇するが、後述するように内面調整にナデ調整が卓越するなどの点で、本段階に位置付けておきたい。内面調整は一部にヨコハケ

やケズリ調整を認める(2003)が、ナデ調整が卓越する。少数ながらケズリ調整が残存することで、やや古い様相とみることができよう。透孔は方形と三角形(2011)のみで、円形は認めない。

奥谷1号墳は、3条突帯の朝顔形埴輪1点はほぼ完形に復元されるが、円筒埴輪は底部片のみが5個程度出土しているのみで、全形は不明。いずれも底径26~29cm前後のM型である。また、調査が墳丘部のトレンチ調査のみであるため、資料数は限られており、出土資料が本墳の埴輪の全体的傾向を示すかどうかは不明である。

口縁部は、Ⅰa類とⅡa類があり、ややⅠa類が多い。口縁部高は不明。胴部は、朝顔形埴輪より、突帯間隔15.1~15.3cmが知られる。外面調整は、連続的なCa種ヨコハケを基調に、部分的にA種ヨコハケで補う。これは後述する底部外面調整も同様である。内面はナデ調整とみられるが、マメツや割離により断定が困難な資料が多い。突帯は2a類と3a類があり、3a類が多い。いずれも突帯高1cm前後と一定の高さを保っている。突帯間隔の設定には、方形判突が確認される。透孔は確認されるものは方形のみで、各段に2孔が90°ずらせて配置される。

底部高は、18.5~19.5cmで、内面はタテ・ナメハケを施すものと、ナデ調整のみの2者があるが、後者はマメツや割離が顕著でハケ調整がなされていた可能性も残る。底部に透孔を穿つものは認められない。

口縁部高が不明なため、全体の割付方式は推測するしかない。底部高は19cm前後と低く、突帯間隔は底部高とは異なる規格で割付けられており、可能性として口縁部高が底部高の1/2規格で割付けられた割付3式(鎌方2003)を想定したい。

田尾茶臼山古墳資料は、底径18cm前後のS型があり、底部高21.4cm前後とやや高い。口縁部高、突帯間隔は不明である。外面調整はタテハケを主体に、横立山塚古墳と同様、ヨコナデ調整により1次調整を消すものがある。内面はナデ調整のみを認める。突帯は2bないし3b類で、突帯高は1.0cm前後を測る。透孔は、方形のものを数点認める。突帯設定には凹線技法が採用されている。外面ヨコハケ調整が主体とならない点は、S型であることともに、資料数の制約による点も大きいと考えられる。現状では、上述した内容から本段階に位置付けられると考えるが、資料数の増加を待って再考したい。なお、円筒埴輪以外に、家形埴輪が出土している。

## Ⅲ期1段階

本期では、外面調整としてB種ヨコハケの導入や、それによる規格の縮小化を指標とする。B種ヨコハケの出現頻度は本段階ではやや低く、断片的な資料では時期を特定できない場合が多い。香川県中岡西井坪遺跡焼成土坑等出土資料(香川県教育委員会1996)、及び既述した今岡古墳と、徳島県大代古墳(徳島県教育委員会2005)、同宝鐘寺古墳(鳴門市教育委員会2011)内面調整にナデ調整が卓越するとして、香川県龍王山古墳(さぬき市教育委員会2013)と徳島県国高山古墳(阿南市1987)、同曾我

氏神社・2号墳(天羽・岡山1982)、愛媛県松山古墳(山内2007 a)は、本期の可能性を考えたい。なお、今岡古墳や龍王山古墳、曾我氏神社1・2号墳では壘形埴輪が出土しており、円筒埴輪とともに壘形埴輪の供給も継続していることが確認される。

また、これまで円筒埴輪の樹立は、前方後円墳に限定されてきたが、本期に至り円墳等(龍王山古墳・板山古墳・曾我氏神社1・2号墳)にも導入が図られる<sup>132)</sup>。こうした円墳等への円筒埴輪祭祀の導入については、その裾野の拡大といった評価はふさわしくなく<sup>133)</sup>、前方後円墳築造、つまりは同墳被葬者の絶対数の減少により、見かけの上で同祭祀が広い層へと拡大した可能性を想定したい。つまりは、同一時期における円筒埴輪祭祀の許容数にさほど大きな変化は認められないのである。

中間西井坪遺跡では、焼成土坑、大形堅穴建物、谷3、1号墳周溝から当該期の資料が出土している。円筒埴輪、朝顔形埴輪とともに、冢形・蓋形・盾形・船形の各形埴輪と、土製棺がある。円筒埴輪は、口径35～44cm、底径24～32cmのM型のみが認められ、報告者である久保徹也により、出土遺構や埴輪の諸属性より、1・2 a・2 bの3類に分類され、1類は中間西井坪遺跡での埴輪生産に先行して外部より持ち込まれ、1号墳に樹立された埴輪、2類は遺跡で生産された埴輪で、2 a類が先行し、2 b類は今岡古墳に供給されたものとされた。しかし、2 a類と2 b類については、外面調整や透孔等、近似する内容も多く、口縁部や突帯形状の差が、両者の時期を区分する指標となっている。しかし、出土した埴輪の量的な問題と情報の欠落は決定的で、両者に時期差を伴うかどうかは私には判断ができない。以下では、資料的に内容が異なる程度判明する2 a類について、検討をおこなうこととする。

各部の計測値は、口縁部高8.0cmのもの、口縁部高10.2cm、突帯間隔14.4cmのもの、口縁部高12.0cmのもの、突帯間隔15.5～16.0cmのもの、口縁部高20.8cmのものがある。計測値より2 a類は、底部高が突帯間隔より高く、口縁部高が突帯間隔より低いB型2型に分類される。また割付方式は、全形が不明なため直接復元することはできないが、あく口縁部高を基準に、いくつかの組み合わせから有効な数値を求めると、口縁部高8.0cmは、突帯間隔15.5～16.0cmの半分、同様に口縁部高10.2cmは、底部高20.8cmの半分であり、口縁部高と突帯間隔の和はいずれも底部高に近似しないことから、割付3式が適用された可能性が高いと考えられる。

口縁部形態は、II a類とともにIII類に近いものが認められ、新しい様相といえる。割付2式の導入以降、口縁部高も一定程度規格化される過程で、外反度の強い口縁部形態では、安定した口縁部高を維持することが困難であり、III類への指向性を強めたと考えられる。透孔は、長方形が多数を占め、1段あたりの孔数は4～5孔と、多孔傾向にある点は特異である。形態的規格性に影響を与えない部分で、独自性が持ち込まれた好例と評価したい。突帯形状は2・3類があり、突帯高1cm前後と一定の高さを維持している。また突帯間隔の設定には、刺突技法

が用いられている。外面調整はタテハケで、ヨコハケは認められない。内面は一部ハケ調整を認めるが、基本的にナデ調整で仕上げられる。

上記したように、中間西井坪遺跡2 a類埴輪には、明確なB種ヨコハケは認められないものの、割付3式が適用されている可能性が高いため、本段階に位置付けられようと考えた<sup>134)</sup>。また、同埴輪にみられる諸属性(口縁部形態、突帯形状、突帯設定技法、外面調整、透孔等)は、既述した今岡古墳出土の埴輪とも多く共通する。今岡古墳出土資料は、小片が多く、突帯間隔や底部高等の規格が不明なため、断定は困難だが、2 b類と共に2 a類埴輪も今岡古墳へ供給された可能性は高いのではないかと考える。

なお、今岡古墳の円筒埴輪の外面調整には、出現頻度は低いものの、連続的なヨコハケやヨコ方向のナデ・板ナデ調整が施されている。静止痕が不明瞭で、B種ヨコハケとは断定できないものの、その可能性は高い。口縁部にIII類が含まれることから、本段階の資料と位置付ける。

大代古墳では、円筒埴輪、朝顔形埴輪のほかに、形象埴輪として家、圓形、盾、蓋等がある。円筒埴輪は、口径23～30cm、底径16～25cmのS型とM型が出土している。一部を除いて小片からの復元値であり確認に乏しいが、おそらくはM型が主体を占めると考えられる。また、一部の埴輪の素地粘土に結晶片岩粒が含まれており、吉野川流域の沖積粘土を使用したか、意図的に混入した可能性が考えられる。いずれにしろ、在地で製作されたことは確実であろう。

円筒埴輪は、すべて破片資料であり、全体形状は不明<sup>135)</sup>。各部の計測値は、口縁部高12.2cm、底部高10.9cmのもの各1点を確認され、突帯間隔は不明である。底部高10.9cmは、円筒埴輪の底部としては低く、形象埴輪の基底部等の可能性が考えられる。いずれにせよ、割付方式を復元することはできない。口縁部は、I a・I b類が主体的で、その他にII a類がある<sup>136)</sup>。突帯は2類もしくは3類が主体で、突帯高0.8～1.3cmの一定度の高さを有するものが多数を占める。突帯間隔の設定は、明確に凹縁技法が確認される一方で、突帯側面にそれが確認できない資料もあり、刺突技法に依るものも含まれている可能性も考えられる。外面調整は、タテハケのみのもの以外に、2次調整としてC a種ヨコハケ、B b種ヨコハケがある。ヨコハケの出現率は高いが、多数を占めるのはC a種ヨコハケである。なお、底部は2次調整を欠くものが多い。内面は、胴部はナデ調整が卓越し、口縁部にヨコハケが加えられている。なお、ケズリ調整は認めない。透孔は、残存部より円形とみられるものが一定数出土しているようだが、方形の可能性のあるものもあり、完全には円形に統一されているわけではない。孔数は、胴部径の1/4周が残存しているものに透孔が認められないものがあり、断定はできないが1段2孔であった可能性が高い。なお、現状で口縁部と底部に透孔は穿たれていないようである。

宝輪寺古墳では、円筒埴輪と朝顔形埴輪が出土している。トレンチ調査のため、出土量は乏しい。円筒埴輪の口縁部を中心

に赤彩を認める。円筒埴輪は、口径30～34cm、底径20～23cmのM型が確認される。口縁部高や突帯間隔等の数値は不明である。

口縁部はI a類のみ。突帯は高さ0.6～0.8cmとやや低く、3 b類が主体を占める。突帯間隔の設定は、1点のみ円形刺突が確認される。外面調整には、1次調整後にB種ヨコハケと同様な明瞭な静止痕を残すものの、いわゆるハケ条痕は不明瞭で、B b種ヨコハケを意識した板ナデ調整が施され、他にあまり例をみない。ハケ条痕が表出しない工具をあえて選択した可能性が高く、意図的なものであったと考えられ、この点で大代古墳と大きく異なる。本墳の埴輪が大代古墳に先行する可能性も考えられるが、墳丘規模や埋葬施設、形象埴輪の有無等を考慮するならば、大代古墳の被葬者との階層差が、こうした差異を表出している可能性も考慮する必要がある。内面調整は、口縁部でヨコナデ及び板ナデが確認され、胴一底部は基本的にナデ調整とみられる。ケズリ調整は認めない。透孔は、確認されるものはすべて円形で、突帯の上下で90°ずらせて穿たれている資料より、各段2孔を十字形に配していた可能性が高い。なお小片のため断定はできないが、口縁部と底部に透孔が穿たれた資料は出土していない。

国高山西古墳では、円筒埴輪と朝顔形埴輪の小片30点程度が出土しているが、未報告資料のため詳細な出土位置や出土状況は不明である。円筒埴輪は、口径30cm以下のS型のみ認める。口縁部高や突帯間隔等は不明。口縁部は1点I a類のみ認める。突帯は、高さ0.6～1.1cmの3 b類が主体を占める。突帯間隔の設定技法は不明。外面調整はタテハケ、内面調整はナデ調整のみ認める。透孔の形状は不明で、底部に透孔が穿たれた資料が1点出土している。

国高山西古墳資料については、本期に属する可能性が高いが断定はできない。今後の調査により、良好な資料の出土を待って、再度考えたい。

曾我氏神社1・2号墳資料も、小片の資料が多く、全体形状は不明である。口縁部II a類、突帯形状2 a・2 b・3 b類があり、3 b類が主体を占めるようである。突帯間隔の設定は、方形刺突による。方形透孔を数点確認した。外面調整はC a種ヨコハケが主体を占め、ごく少数A種ヨコハケとともに、B b種ヨコハケが出土している。B種ヨコハケの出現頻度は非常に低い。内面調整は、ハケとナデ調整を確認した。また、二重口縁形態の歪形埴輪や形象埴輪を伴う。

以上の検討により、中間西井坪遺跡出土2類埴輪は割付3式の採用をもって、大代古墳と宝鐘寺古墳はB種ヨコハケの導入をもって本期に位置付けた。異なる属性で、同時期の資料として位置付けたわけだが、割付3式の普及が、形態的な規格性とB種ヨコハケによる調整手法の画一化をもたらしたとの指摘(鎌方2003)に従えば、大代古墳や法輪寺古墳も割付3式により製作された可能性が高い。本期の課題は、今岡古墳における明確なB種ヨコハケの不在である。中間西井坪遺跡での様相が

らも、今岡古墳におけるB種ヨコハケの出現頻度は、大代古墳には遠く及ばない可能性が高い。これを時期差とみるか系統差とみるかで評価は大きく異なるが、今岡古墳、大代古墳ともに資料上の制約により、遑断することは困難であろう。今後の課題としたい。

また、大代古墳と宝鐘寺古墳では、外面2次調整に使用された工具に、明瞭な差異が認められた。おそらくは工人集団の系統差を反映している可能性があり、もし仮にそうだとすれば、今岡古墳における明確なB種ヨコハケの不在も、系統差として理解できる可能性がある。

こうしたB種ヨコハケにみられる多様性を、どのように評価すればよいか。こうした地方色とでも表現すべき多様性は、IV期の香川県大塚山古墳にも認められる(蔵本2016)。そしてそれは、B種ヨコハケという埴輪に特化した調整技法と深く結びついて、顕在化している。前編でも指摘したように、地方での恒常的な埴輪製作が完結しておらず、専門的な工人集団の編成が遅れたことがその要因と考えられよう。

次に、龍王山古墳資料について検討を加える。本古墳資料は、小片のみで、復元された胴部径よりM型ないしS型の規格が認められる。口縁部高、突帯間隔、底部高は不明。口縁部は2点のみだがI a類を認める。突帯は2・3類があり、突帯高は0.9～1.3cmと前段階と大差はない。外面調整は不明なものも多く、タテハケ調整とC a種とみられるヨコハケ調整を認める。内面調整も不明瞭だが、ナデ調整が主体的とみられる。透孔は円形とみられるものが1点あり、底部にも透孔が穿たれた資料がある<sup>17)</sup>。龍王山古墳については、情報量が乏しく、位置付けには否慮するものの、口縁部形態や円形透孔の存在から、本期に位置付けられると考える。

また、本墳から出土した歪形埴輪の底部穿孔方法は、筆者がかつて開放技法としたものである(蔵本2008)。本地域においては、前期後葉に新たに導入された技法で、けば山古墳例のようになすはまった底部に穿孔するものが古く、円筒形に大きく開口する本墳例が新しく位置付けられる可能性がある。

### Ⅲ期2段階

有黒斑の野焼き焼成で、外面調整としてB種ヨコハケの定着・普及を本期の特徴とする。香川県富田茶臼山古墳2号陪塚を標識資料とし、愛媛県観音山古墳(山内2007 a)は本期か前期1段階に下る可能性を考える。

富田茶臼山古墳2号陪塚資料は、円筒埴輪と少数の形象埴輪がある。円筒埴輪はいずれも小片で、全体形状は不明。口径20～34cm、底径19～27cmをそれぞれ計測し、M型とS型を認める。底部高のみ判明する資料が数点あり、17～18cm前後と前段階よりも縮小するものの、同時期の畿内地域の資料と比較すると一定の高さを維持している。口縁部はI aないしI b類のみを認める。外面調整は、底部を中心にタテハケのみのものを認めるが、B b種ヨコハケの出現頻度は高い。内面調整は、口縁部はハケやヨコナデにより丁寧に整えられているが、底一胴部はナデ調整が主体となるものとみられる。透孔は円形のみ認める。

2号陪塚出土資料については、B b種ヨコハケの高い出現頻度、底部高の減少という点より、本期に位置付けられるものと考えられる。課題となるのは、主墳である富田茶臼山古墳との関係であろう。富田茶臼山古墳出土資料は、全体に焼成があまく、外面調整や各部の規格が不明なため、2号陪塚出土資料と比較が困難で、扁平上の位置付けも課題が多い。突帯形状からの判断だが、既述した今岡古墳出土資料よりも突出度ややや低いものも多く、後出する可能性が指摘できる。突帯形成のみで断断は控えたが、本期の築造を否定する根拠とはならないだろう。

#### IV期1段階

徳島市渋野丸山古墳は、有黒泥の資料であることから、これまで川西編年Ⅲ期の資料として位置付けられてきた。前編でも、それを踏襲し、Ⅳ期の資料には含まなかったが、今回資料を詳細に観察することができ、後述するようにならB c種ヨコハケの採用により、Ⅳ期に下る可能性が想定されたため、Ⅳ期1段階の資料として位置付ける。古墳は、平成11～17年度に徳島市教育委員会により6次に及ぶ発掘調査がなされ、報告書が刊行された(徳島市教育委員会2006)。報告書刊行以後も、同市教委による調査は継続しているが、今回検討する資料は、報告書掲載資料を中心としたものに限る。

規格としては、口径が33～37cmのM型と、30cm以下のS型の大きく2者がある。M型は、口縁部や底部の破片資料が数個体報告されているのみで、突帯条数を含め全形は不明である。おそらくは後円部墳頂部等の限られた場所に供献されていたと考えられる。一方S型は円筒埴輪の多数を占めており、各段テラス面に圍繞供献されていたと考えられる。S型には、器高50cmのもの(S1)と、同45cmのもの(S2)の2タイプがある。S1は、3条突帯と2条突帯のものがあり、S2は2条突帯のみに限られる。

各部数値は、M型は口縁部高が13～14cm前後のもの、16cm前後のもの大きく2タイプあり、底部高は13cm前後のもの1点を認める。一方、S型はバリエーションに富むが、概ね底部高を基準に割り付けられていると考えられる。底部高は、13～14cm前後、16cm前後、20cm前後、22cm前後の4規格があり、S1型3条突帯は、M型と同じ13～14cm前後の底部高を、S1型2条突帯は、16cm前後と22cm前後の2つの底部高をそれぞれ採用し、口縁部と突帯間隔を3等分ないし2等分する。一方で、S2型2条突帯は、16cm前後と20cm前後の底部高を採用し、後者は口縁部高と突帯間隔を等分するが、前者は突帯間隔を底部高と同じとし、口縁部高を14cm前後とする。この口縁部高は、S1型2条突帯の底部高22cm前後の規格と同じ高さを用意したものと考えられる。つまりS型は、器高の1/3ないし1/4ないし1/5の底部高を基準に、口縁部高と突帯間隔を等分することを基本に、割り付けられていると考えられる。

口縁部は、I a・I b・II a・III期がある。II b類がやや多数を占めるが、限られた資料なので断定はできない。また、上記規格と口縁部形態は整合的ではない。外面調整は、ヨコハケとテテ・ナナメハケがあり、前者が多い。ヨコハケには、ストロークの長く連続的なC a種ヨコハケが多用される。B種ヨコハケはB b種とB c種があるが、いずれも静止痕の出現頻度は

一定せず、装飾的效果に乏しいものが多い。また、口縁部にC a種ヨコハケを施した後、ナナメハケを連続的に施すものがある。これはⅢ期の大代古墳にも同様な調整を認め、大代古墳の埴輪製作に携わった人集団が本墳の埴輪の製作にも関与した可能性を示唆している。内面調整は、口縁部にヨコ・ナナメハケを、体へ底部はテテ調整をそれぞれ施す。突帯は、2 a類と3 b類があり、前者が多い。透孔は円形に統一され、M型は副部最上段に2孔を穿つものがあるが、それ以下は不明、S型は2条突帯の場合は副部に、3条突帯の場合は3段目にそれぞれ2孔施す。3条突帯副部2段目は透孔は穿たれず、地城色とみることができよう。また、S型2条突帯の底部に透孔を穿つ例があるが、それが上記した細別タイプのどれに相当するかは不明である。

以上、本地域における器台系埴輪の導入からB種ヨコハケの定着までを、3期6段階に区分して見てきた。近年の調査の進展により、資料数は増加したものの、多くの古墳で、限られた破片資料を操作して、時期決定をせざるを得ず、恣意的な編年案となってしまうことは否めない。今後の課題としたい。

#### 4 津田湾周辺古墳群の評価

本地域の円筒埴輪は、基本的には前方後円墳を中心にその導入が図られている。また、埴輪の供献を欠落する古墳を最下層に、円筒埴輪の有無や形象埴輪等の質量によって、本地域に限らず、埴輪祭祀の本質は、相対的に重層的な階層差の演出にあったと評価したい。以下では、調査の進んだ香川県津田湾周辺の古墳を対象に、古墳祭祀における埴輪のありかたを見ていくこととする。

本地域の埴輪は、既述したように、赤山古墳がⅠ期5段階に、岩崎山4号墳がⅡ期1段階に、龍王山古墳がⅢ期1段階に、富田茶臼山古墳がⅢ期2段階に、それぞれ位置付けられると考える。このほか壘形埴輪や副葬品の内容より、奥14号墳と鶴の部山古墳がⅠ期1～2段階に、奥3号墳と川東古墳がⅡ期2～3段階に、古枝古墳がⅠ期4段階に、一つ山古墳がⅠ期5段階ないしⅡ期1段階に、けは山古墳がⅡ期2段階に、岩崎山1号墳がⅢ期1段階に、それぞれ位置付けられよう。本地域では、Ⅰ期1～2段階よりⅢ期2段階にかけて前方後円墳の築造が継続する。

Ⅰ期1～4段階にかけて築造された前方後円墳は、墳長30～37mとはほぼ一定するのに対し、Ⅰ期5段階の赤山古墳において墳長50m前後と伸長し、埋葬施設に別荘式石棺が導入され、墳丘には円筒埴輪が圍繞供献される。それ以前の諸墳と比して、大きな飛躍が認められ、その背後に畿内地域の集団からの、祭祀儀礼に対する積極的な援助があった可能性が想定される。ここに本地域の集団の大きな画期を認めることができよう。

それまで、鶴の部山以下東部の集団と、奥14号以下西部の集団が、同時期にそれぞれ前方後円墳の被葬者を輩出してきたが、本期に至り赤山古墳1基に集約される。同時に、畿内の集団との関係がより強く表現されるようになったことは、それが畿内側からの関与や主導といった状況を想定させるものとも考



えられる。

こうした傾向は、Ⅱ期1段階に継続する。岩崎山4号墳は墳長約62mと規模を拡大し、割立式石棺には鷲の山系石棺製作工人の関与の可能性が指摘(蔵本2012a)で、火山系石棺のなかでは特殊な位置を占める。墳丘には、壘形埴輪と円筒埴輪以外に、家・盾・草摺等の形象埴輪や、鱗片円筒埴輪等の多彩な埴輪が供献され、佐紀盾列古墳群との関係も想定されてきた。また、近接して径10m前後の小規模な円墳と考えられる岩崎山5号墳があり、箱式石棺に仿製鏡や玉類等の副葬品を有する。同一古墳群内で従属関係を伴った階層関係を表示する。

また、径約25mの円墳の一つ山古墳は、埋葬施設に割立式石棺を搬入するものの、在地系の壘形埴輪を円筒供献するのみで、円筒埴輪の有無による階層差を、岩崎山4号墳との間に顕在化させる。円墳への石棺の搬入は、本地域では現在確認されている唯一の例であり、前方後円墳被葬者以外への石棺の搬入例として特殊な位置を占める。より広範な階層へ石棺使用が拡大した可能性があり、上位階層の重層化が指摘できよう。

Ⅱ期2段階のけぼ山古墳では、前方後円墳の築造や割立式石棺への埋葬は継続するものの、墳長約55mと規模が縮小し、円筒埴輪の供献は限定され、壘形埴輪の円筒供献が主体となる。岩崎山4号墳と比して、相対的な凋落傾向を読み取ることができよう。

次のⅢ期1段階には、前方後円墳の築造は停止し<sup>(註30)</sup>、径約25mの龍王山古墳や、同約19mの岩崎山1号墳の円墳のみが築造される。両墳への割立式石棺の搬入は停止された可能性があり、壘形埴輪と円筒埴輪、家形埴輪等の形象埴輪の供献が復活する。しかし、岩崎山4号墳にみられた多彩な形象埴輪はそこではなく、さらにけぼ山古墳同様、円筒埴輪に対して壘形埴輪優位の供献は継続する。岩崎山1号墳で長方板葺短甲等が副葬されるもの、より一層の凋落傾向をみることができよう。

以上、津田湾周辺の古墳群の動態は、Ⅰ期5段階の赤山古墳に画期を認め、Ⅱ期1段階の岩崎山4号墳をピークに、時期ごとに連続して墳丘規模を縮小し、壘形埴輪主体の円筒供献へのシフト、形象埴輪の質量の低下、割立式石棺への埋葬の放棄、果ては前方後円墳築造の終焉といった、一貫した凋落傾向を認めることができる。

一方で、赤山古墳、岩崎山4号墳、龍王山古墳等、各々の時期にふさわしい埴輪が導入されているのであり、畿内地域の集団との連携は継続していったことは間違いない。しかし、そうした中で、Ⅲ期1～2段階に墳長約140mの富田茶臼山古墳が築造される。多量の円筒埴輪の円筒供献や、家・盾等の多彩な形象埴輪の樹立が確認され、盾形周濠(溝)の周囲に、少なくとも3基の陪塚を促える。本墳の築造を、上述した津田湾周辺古墳群の延長上<sup>(註30)</sup>に位置付けるべきではないであろう。Ⅲ期1段階まで津田湾周辺古墳群の築造とは明らかに断絶した位置に、富田茶臼山古墳は成立すると考える。

## 脚註

小橋を執筆するにあたり、一瀬和夫、鎌方正樹、山内英樹の

各氏からは、ご教示・ご指導を頂戴した。また、資料実験に際し、岡本治代、亀井美希、亀岡史曉、下田隆隆、高上拓、西本沙織、藤川智之、松田朝由、三好亮太、村田昌也、山本一伸、阿南市教育委員会、愛媛県教育委員会、公益財団法人藤田共済会郷土博物館、坂出市教育委員会、さぬき市教育委員会、高松市埋蔵文化財センター、徳島県立博物館、徳島県立埋蔵文化財センター、徳島市教育委員会、鳴門市教育委員会、松山市役所の各氏・各機関には、多大なるご高配を賜った。記して感謝いたします。

(順不同・敬称略)

小橋では、紙幅の都合上、既出の埴輪資料の図面については、掲載しなかった。したがって読者には、非常にわかりづらい内容となったことは否めない。当該期の埴輪資料については、中国四国前方後円墳研究会2010や同2011にまとめられており、参照されたい。

(2016年8月31日稿了)

## 補註

- ① 口径や底径等の計測値から求められる規格や、後述する口径部や突部の形態分類は、いずれも十河良和氏の分類案(十河2003)を用いる。
- ② 報告書(徳島県教育委員会2005)ではⅡ字形の断面分割の可能性を指摘するが、掲載された資料のみからそれを断定することは困難であろう。
- ③ 今回取り上げることができなかったが、本地域では香川県石輪塚古墳・姫塚古墳・福富山塚古墳、愛媛県玉比売命神古墳より、古墳時代前半期の器系埴輪が出土している。
- ④ 以前発表した壘形埴輪の編年(蔵本2004)については、その後の研究の深化により、訂正すべき箇所が多い。修正案については、機会があれば公表したい。
- ⑤ 例えば、香川県東古墳があげられる。
- ⑥ 例えば、香川県野田古墳や国分寺六丁目古墳があげられる。
- ⑦ 例えば、香川県吉岡神社古墳があげられる。
- ⑧ 奥谷1号墳資料は、発掘調査報告書が未刊であるが、徳島市教育委員会のご高配により、資料の実見が許された。記載は、その際の熱覚記録をもととする。
- ⑨ 採集資料だが、坂出市教育委員会と藤田郷土博物館に所蔵され、今回、両機関のご高配により、資料の実見が許された。記載は、その際の熱覚記録をもととする。
- ⑩ 平成12年度高松市教育委員会調査時出土資料に、ケズリ調整が施されたものはない。下笠原小学校保管資料に1点認められる(高松市教育委員会1991)ようだが、実見しておらず不詳である。
- ⑪ 平成12年度高松市教育委員会調査時出土資料には方形透孔のみが確認され、下笠原小学校保管資料に三角形のものがあるとされる。
- ⑫ 国高山古墳は、前方後円墳が円墳か墳形について議論がある。正式な調査報告書が未刊のため、ここでは言及は避けた。
- ⑬ 小規模墳への普遍的な円筒埴輪祭器の拡散は、Ⅳ期2段階か3段階に下り、その段階で在地の埴輪生産のための工人集団の編成がなされた可能性がある(蔵本2016)。
- ⑭ なお、1号墳出土の1類についても、口径部高13cm前後、突部間幅14.0～14.8cmのもの、口径部高8.4cm前後、同12.4cm前

後のものがあり、底部高が不明ながら、割付3式で規格された可能性があり、本期に属する可能性は高い。

- 註15 藤川智之は3条突帯4段構の規格を提示する(藤川2008)。その可能性は否定しないが、突帯間隔も不明な小片ばかりであり、断定することは困難と考え、ここでは全形不明の埴輪としておく。
- 註16 報告書掲載の資料には、墨原として図示されているものがあるが、端部が欠損しているか、口縁部以外の資料の部である。その他報告書掲載範囲には、天地を逆に図化しているものや、横きに墨のあるものなど、その多くに誤認がある。
- 註17 報告では壘形埴輪の底部としている(21・22)が、透孔を伴うことや壘形埴輪とすると復元径が大きくなることから、円筒埴輪の底部と考える。
- 註18 早くに破壊され、実態が不明な北羽立峠古墳を除く。
- 註19 例えば、「外部地域とのネットワークを形成した津田古墳群の到達点」といった評価(松田2015)とは異なる位置付けがなされるべきだと考える。

#### 引用・参考文献

- 青柳幸介 1995 家形埴輪の製作技法について『日本の美術 第348号家形はにわ』至文堂
- 文雄 天沼功・岡山真知子 1982 『式部氏社古墳群調査報告』『徳島県博物館紀要』第13集 徳島県博物館
- 大久保隆也 1996 『円筒埴輪』『四国歴史自動車道建設に伴う縄文文化財発掘調査報告第25冊 中四西井洋雄1』。奈良県教育委員会・日本道路公団
- 小栗明彦 2007 『壘形埴輪編年表』『埴輪考1 - 円筒埴輪をたどる -』大阪大谷大学博物館
- 藤方正樹 1997 『中四西井の円筒埴輪』『史跡・大田寺田境内1 - 杉山古墳地区の発掘調査 - 整理事業報告 -』。奈良県教育委員会
- 藤方正樹 2003 『古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年』『埴輪論集』第4号、埴輪検討会
- 川西忠幸 1988 『円筒埴輪の分布』『古墳時代政治史研究』徳島県
- 蔵本晋司 1999 『遺跡における古墳出現の背景 - 東国系土器群の提唱とその背景についての若干の考察 -』『四国歴史自動車道建設に伴う縄文文化財発掘調査報告第32冊 中四西井洋雄2』。香川県教育委員会・日本道路公団
- 蔵本晋司 2004 『丸亀市古神社古墳の再検討 - 供養土器のありかを中心として -』『樹形山香川県縄文文化財発掘センター研究紀要』Ⅲ
- 蔵本晋司 2007 『高松市茶臼山古墳の基礎的研究1 - 円筒埴輪の整理から -』『香川県縄文文化財センター研究紀要』Ⅲ
- 蔵本晋司 2008 『土器供給の系図 - 古墳時代前期壘形埴輪の底部穿孔方法について -』『古代学研究』第180号、古代学研究会
- 蔵本晋司 2012 a 『遺跡差別式土器の成立とその背景』『ミニシンポジウム 海からみた四国の古墳時代』。公益財団法人香川県縄文文化財センター
- 蔵本晋司 2012 b 『四国』『古墳時代の考古学2 内海出土と展開の地誌編』。同成社
- 蔵本晋司 2016 『出土埴輪の編年の位置関係』『道11号大内白身バイパス工事施工に伴う縄文文化財発掘調査報告第1巻 埴形家遺跡』。香川県教育委員会・国交通省四国地方整備局
- 栗林誠治 2015 『四国東北部(徳島県)』『前期古墳編年を再考するⅡ - 古墳出土土器をめぐって -』。中国四国前方後円墳研究会
- 柴田昌司 2015 『四国北西部における後期弥生土器と古式土器器。そして前期古墳』『前期古墳編年を再考するⅢ - 古墳出土土器をめぐって -』。中国四国前方後円墳研究会
- 十河良和 2003 『和泉の円筒埴輪編年概観』『埴輪論集』第5号、埴輪検討会
- 高橋文彦 1986 『部形埴輪の編年と古墳祭祀』『史料』第71巻第2号、史学研究会
- 高橋修平 1968 『神井・古墳』『文化財協会報』特別号第3集、香川県文化財保護協会
- 信実寿夫 2014 『出土遺物の特徴と年代』高松市茶臼山古墳。香川県教育委員会
- 埴輪検討会 2003 『埴輪論集』第4号、第5号
- 藤原正 2010 『云雀における前期古墳の埴輪 - 西日本への展開を視野に -』『中国四国前方後円墳研究会第13回研究会 円筒埴輪の導入とその展開』。中国四国前方後円墳研究会
- 藤田智之 2008 『阿直における埴輪の受容 - 大谷古墳群壘形埴輪の復元成果から -』『真知』第8号、財団法人香川県縄文文化財センター
- 北條隆彦 2003 『東四国地域における前方後円墳成立過程の解明』平成12-14年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書
- 正岡勝夫 2003 『今治市丸山古墳について』『遺跡』第39号、遺跡発行会
- 松田朝由 2013 『土器・埴輪の検討』『津田古墳群調査報告書 第二分冊考察編』さぬき市教育委員会
- 松田朝由 2015 『津田古墳群と茶臼山古墳をみる』。さぬき市教育委員会
- 松本康彦 2010 『四国北東部の埴輪の導入 - 遺跡を中心に -』『中国四国前方後円墳研究会第13回研究会 円筒埴輪の導入とその展開』。中国四国前方後円墳研究会
- 松本康彦 2015 『四国北東部(香川県)』『前期古墳編年を再考するⅢ - 古墳出土土器をめぐって -』。中国四国前方後円墳研究会

- 森下浩行 1983 『高松市鬼塚町今河古墳とその組合式陶器』『香川考古』香川考古学会
- 山内真規 2003 『愛媛県出土埴輪の基礎的研究(3) - 北条市浅田出土の埴輪について -』『紀要愛媛』第3号、愛媛県縄文文化財調査センター
- 山内真規 2007 a 『愛媛県出土埴輪の基礎的研究(7) - 松山平野における中期古墳の埴輪について -』『紀要愛媛』第7号、愛媛県縄文文化財調査センター
- 山内真規 2007 b 『相の谷1号墳土埴輪についての問題』『今治市の谷1号墳出土遺物』愛媛県歴史文化博物館
- 渡部明夫 1976 『今河古墳群の円筒埴輪』『香川県文化財協会報』第69号、香川県文化財保護協会

#### 報告書等

- 阿南市 1987 『阿南市史』第1巻
- 徳島町教育委員会 2002 『狭天山古墳発掘調査報告書』
- 徳島町教育委員会 2004 『狭天山古墳発掘調査報告書』
- 愛媛県歴史文化博物館 2007 『今治市の谷1号墳出土遺物』
- 大川町教育委員会 1990 『富田茶臼山古墳発掘調査報告書』
- 大川町教育委員会 1998 『個人住宅建設に伴う縄文文化財発掘調査報告書 富田茶臼山古墳発掘部』
- 香川県教育委員会 1989 『香川県無蔵文化財調査年報』昭和63年度
- 香川県教育委員会・日本道路公団 1996 『四国歴史自動車道建設に伴う縄文文化財発掘調査報告第25冊 中四西井洋雄1』
- 香川県教育委員会 1999 『香川県無蔵文化財調査年報』平成9年度
- 香川県教育委員会 2014 『高松市茶臼山古墳』さぬき市教育委員会 2013 『津田古墳群調査報告書』
- 高松市教育委員会 1991 『狭天山(第1)号墳発掘調査報告』
- 高松市教育委員会 2000 『高松市古遺跡発掘調査報告 平成11年度国庫補助事業 -』
- 高松市教育委員会 2001 『高松市古遺跡発掘調査報告 平成20年度国庫補助事業 -』
- 高松市教育委員会 2010 『高松市古遺跡発掘調査報告 平成21年度国庫補助事業 -』
- 高松市教育委員会 2013 『高松市古遺跡発掘調査報告 平成24年度国庫補助事業 -』
- 中国四国前方後円墳研究会 2010 『第13回研究会 円筒埴輪の導入とその展開』
- 中国四国前方後円墳研究会 2011 『第14回研究会 埴輪から見た前期古墳の展開』
- 津田町教育委員会 2002 『岡山山古墳4号墳発掘調査報告書』
- 徳島県教育委員会 2005 『四国歴史自動車道建設に伴う縄文文化財発掘調査報告書 大谷古墳』
- 徳島県教育委員会 2006 『津野丸山古墳発掘調査報告書』
- 田原本町教育委員会 2007 『田原本町の遺跡5 田原本町の埴輪』
- 鳴門市教育委員会 2011 『鳴門市古墳群発掘調査報告書 - 鳴門市内遺跡調査事業に伴う縄文文化財発掘調査報告書 -』

第20表 土器・埴形埴輪観察表

観文番号	古墳名	出土位置	種類	記録	形状		色澤		胎土		残存率	備考	観文番号
					内面	外面	内面	外面	西面	東面			
1	今河古墳	式土師器	小皿	胴部：ヨコナギ？体部：短オボエ・ナギ	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	10.4	1.8	1.8 赤褐色	K286	K286
2	今河古墳	赤土師器	小皿	胴部：ヨコナギ	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	10.4	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	香取川下流流域土師	K288
3	今河古墳	赤土師器	小皿	胴部：ヨコナギ？体部：短オボエ・ナギ	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	10.4	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	K284
4	今河古墳	赤土師器	高杯	胴部：ヨコナギ？脚部：短オボエ・ナギ	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	10.4	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	K284
5	今河古墳	埴形埴輪		胴部：ヨコナギ	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	20.6	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	K285

観文番号	古墳名	出土位置	器種	部位	形状		色澤		胎土		残存率	備考	観文番号
					内面	外面	内面	外面	西面	東面			
6	今河古墳	円筒	口縁部	ナギハナズ長子ナギ	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	10.4	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	K286
7	今河古墳	円筒	口縁部	ヨコナギ？メナツ	10YR7.4に赤い色	10YR7.4に赤い色	10YR7.4に赤い色	10YR7.4に赤い色	10.4	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	K275
8	今河古墳	円筒	口縁部	ヨコナギ？メナツ	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	10.4	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	K275
9	今河古墳	円筒	口縁部	ナギハナズ長子ナギ	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	10.4	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	K277
10	今河古墳	円筒	口縁部	ナギハナズ長子ナギ	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	10.4	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	K277
11	今河古墳	円筒	口縁部	ナギハナズ長子ナギ	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	10.4	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	K277
12	今河古墳	円筒	口縁部	ヨコナギ	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	10.4	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	K277
13	今河古墳	円筒	口縁部	ヨコナギ	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	10.4	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	K288
14	今河古墳	円筒	口縁部	ナギハナズ長子ナギ	2.5YR6.6に赤い色	2.5YR6.6に赤い色	2.5YR6.6に赤い色	2.5YR6.6に赤い色	10.4	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	K281
15	今河古墳	円筒	口縁部	ナギハナズ長子ナギ	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	10.4	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	K281
16	今河古墳	円筒	口縁部	ナギハナズ長子ナギ	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	10.4	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	K281
17	今河古墳	円筒	口縁部	ナギハナズ長子ナギ	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	10.4	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	K281
18	今河古墳	円筒	口縁部	ナギハナズ長子ナギ	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.4に赤い色	10.4	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	K275・K277
19	今河古墳	円筒	口縁部	ナギハナズ長子ナギ	7.5YR6.4に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	10.4	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	K281
20	今河古墳	埴形埴輪	胴部	ナギハナズ長子ナギ	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	21.1	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	K285
21	今河古墳	円筒	胴部	ナギハナズ長子ナギ	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	21.1	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	K286
22	今河古墳	円筒	胴部	ナギハナズ長子ナギ	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	21.1	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	K288
23	今河古墳	円筒	胴部	ナギハナズ長子ナギ	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	21.1	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	K288
24	今河古墳	円筒	胴部	ナギハナズ長子ナギ	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	7.5YR6.6に赤い色	21.1	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	1.8 赤褐色	K249

第21表 円筒埴輪観察表1

船文番号	名称名	海上位置	目標	部位	翼型		目標形状	色調		動土	目録	計測値 (mm)		保存率	備考	製品番号
					外周	内周		外周	内周			幅	高さ			
25	今福古墳	同墳	同墳	同墳	3コハナ	龍ヶ岳・マメツ	3 a 類	5YR5.6 弱赤褐色	5YR6.6 橙	中・並		20	11	1.8 未満		K266
26	今福古墳	同墳	同墳	同墳	3コハナ	ナチ・ナチメハノ後子	2 b 類	10YR6.6 弱黄	10YR8.6 弱黄褐色	中・並		22	09	1.8 未満	龍ヶ岳遺孔	K277
27	今福古墳	同墳	同墳	同墳	3コハナ	龍ヶ岳・龍ヶ岳	3 a 類	7.5YR6.6 橙	5YR6.6 橙	中・並		26	14	1.8 未満	外周赤粉	K279
28	今福古墳	同墳	同墳	同墳	ナチ	龍ヶ岳・ナチ	2 a 類	5YR6.6 橙	5YR6.6 橙	中・並		19	14	1.8 未満		K286
29	今福古墳	同墳	同墳	同墳	3コハナ	ナチメハノ後子	3 a 類	7.5YR5.6 弱黄	5YR5.6 弱赤褐色	中・並		20	11	1.8 未満		K277
30	今福古墳	同墳	同墳	同墳	3コハナ	ナチメハノ後子	2 a 類	5YR5.6 弱赤褐色	5YR5.6 弱赤褐色	中・並		18	11	1.8 未満		K289
31	今福古墳	同墳	同墳	同墳	ナチ・ナチメハノ後子	龍ヶ岳・ナチメハノ	2 a 類	5YR5.6 弱赤褐色	5YR5.6 弱赤褐色	中・並		22	28		龍ヶ岳	K286
32	今福古墳	同墳	同墳	同墳	マメツ	龍ヶ岳・龍ヶ岳	2 a 類	10YR8.4 に近い赤褐色	5YR8.4 に近い赤褐色	中・並		26	11	1.8 未満		K279
33	今福古墳	同墳	同墳	同墳	ハナノメツ	龍ヶ岳・ナチメハノ	2 a 類	5YR5.6 弱赤褐色	5YR5.6 弱赤褐色	中・並		26	11	1.8 未満		K277
34	今福古墳	同墳	同墳	同墳	メメツ	龍ヶ岳・ナチメハノ	3 a 類	5YR6.6 に近い赤褐色	5YR6.6 に近い赤褐色	中・並		22	11	1.8 未満		K277
35	今福古墳	同墳	同墳	同墳	ナチ	ナチ・メメツ	2 a 類	5YR6.4 に近い赤褐色	5YR5.4 に近い赤褐色	中・並		31	15	1.8 未満		K2813
36	今福古墳	同墳	同墳	同墳	メメツ	龍ヶ岳・ナチメハノ	2 a 類	7.5YR6.6 橙	5YR6.6 橙	中・並		22	13	1.8 未満		K280
37	今福古墳	同墳	同墳	同墳	ナチメハノ	龍ヶ岳・ナチメハノ	2 a 類	2.5Y7.6 弱黄褐色	10YR6.6 弱黄褐色	中・並		25	12	1.8 未満		K275
38	今福古墳	同墳	同墳	同墳	3コハナ	メメツ・ハナノ	2 b 類	10YR8.4 に近い赤褐色	5YR5.6 弱赤褐色	中・並		14	09	1.8 未満		K286
39	今福古墳	同墳	同墳	同墳	ナチメハノ	ナチ・ナチメハノ後子	3 a 類	10YR2.4 に近い赤褐色	7.5YR2.4 に近い赤褐色	中・並		28	13	1.8 未満	有孔層	K275
40	今福古墳	同墳	同墳	同墳	ナチ・ナチメハノ	龍ヶ岳・ナチメハノ	2 a 類	5YR6.6 に近い赤褐色	5YR6.6 に近い赤褐色	中・並		25	14	1.8 未満		K282
41	今福古墳	同墳	同墳	同墳	ナチメハノ	ナチ・ナチメハノ	3 a 類	5YR6.6 橙	7.5YR6.6 橙	中・並		27	11	1.8 未満	有孔層	K277
42	今福古墳	同墳	同墳	同墳	3コハナ	龍ヶ岳・ナチメハノ	2 c 類	10YR2.6 弱黄	5YR6.6 橙	中・並		18	05	1.8 未満	厚層	K282
43	今福古墳	同墳	同墳	同墳	メメツ	龍ヶ岳・ナチメハノ	2 a 類	7.5YR5.6 弱黄	7.5YR5.6 弱黄	中・並		24	11	1.8 未満	深部遺孔付	K289
44	今福古墳	同墳	同墳	同墳	3コハナ	龍ヶ岳・ナチ	2 a 類	5YR6.4 に近い赤褐色	7.5YR6.4 に近い赤褐色	中・並		19	13	1.8 未満	A付層	K275
45	今福古墳	同墳	同墳	同墳	メメツ	メメツ	2 b 類	10YR8.4 に近い赤褐色	5YR6.6 橙	中・並		19	13	1.8 未満		K275
46	今福古墳	同墳	同墳	同墳	メメツ	ナチ・ナチメハノ	2 a 類	2.5YR5.6 に近い赤褐色	5YR5.4 に近い赤褐色	中・並		26	16	1.8 未満		K286
47	今福古墳	同墳	同墳	同墳	ナチ・ナチメハノ	ナチメハノ後子	3 a 類	10YR8.4 に近い赤褐色	10YR9.3 に近い赤褐色	中・並		23	13	1.8 未満		K277
48	今福古墳	同墳	同墳	同墳	メメツ	龍ヶ岳・ナチメハノ	2 a 類	10YR8.4 に近い赤褐色	7.5YR4 に近い赤褐色	中・並		25	11	1.8 未満		K277
49	今福古墳	同墳	同墳	同墳	ナチメハノ	龍ヶ岳・ナチメハノ	2 a 類	7.5YR6.6 橙	5YR6.6 橙	中・並		16	11	1.8 未満		K282
50	今福古墳	同墳?	同墳?	同墳?	3コハナ・ナチメハノ	メメツ	2 c 類	5YR5.6 弱赤褐色	7.5YR6.6 橙	中・並		18	07	1.8 未満		K2813
51	今福古墳	同墳	同墳	同墳	メメツ	ナチ・メメツ	3 a 類	10YR8.4 に近い赤褐色	7.5YR6.4 に近い赤褐色	中・並		24	12	1.8 未満		K277
52	今福古墳	同墳	同墳	同墳	ナチメハノ・メメツ	ナチ・メメツ	3 a 類	10YR6.6 弱黄	5YR5.6 弱赤褐色	中・並		25	15	1.8 未満		K289

第 22 表 円筒埴輪観察表 2

館文 番号	古墳名	出土位置	器種	部位	形状	内面	口縁部 形状	保管状況	外周	内径	高さ・ 石高・ 石長	配土		貯蔵量 (m <sup>3</sup> )		残存率	備考	物品番号
												角付石	蓋石	蓋石	蓋石			
53	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタ・ナメハハ ク・メヌマ	ナメハハ後子 ナメハハ後子	3 a 類	5Y106.6 形 5Y106.6 形小鏡 い型	中・少	25	1.3	1.8 土溝	1.8 土溝	27	1.3	1.8 土溝	1.8 土溝	相形透孔	K277
54	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタ・ナメハハ ク・メヌマ	ナメハハ ク・メヌマ	2 a 類	5Y105.6 形小鏡 5Y106.6 形 5Y105.6 形小鏡	中・中	28	1.6	1.8 土溝	1.8 土溝	27	1.3	1.8 土溝	1.8 土溝	相形透孔	K275
55	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	2 c 類	5Y105.6 形小鏡 5Y105.6 形小鏡	中・中	15	0.9	1.8 土溝	1.8 土溝	25	1.6	1.8 土溝	1.8 土溝	相形透孔	K273
56	今谷古墳	円墳	銅鏡	ナメハハ ク・メヌマ	ナメハハ ク・メヌマ	2 a 類	5Y105.6 形小鏡 5Y105.6 形小鏡	中・中	30	1.5	1.8 土溝	1.8 土溝	25	1.6	1.8 土溝	1.8 土溝	相形透孔	K275
57	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	ナメハハ ク・メヌマ	3 a 類	5Y106.4 に 近い 5Y106.4 に 近い	中・中	25	1.6	1.8 土溝	1.8 土溝	25	1.6	1.8 土溝	1.8 土溝	相形透孔	K277
58	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	2 a 類	5Y105.6 形小鏡 5Y105.6 形小鏡	中・少	25	1.6	1.8 土溝	1.8 土溝	25	1.6	1.8 土溝	1.8 土溝	相形透孔	K276
59	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	2 b 類	5Y105.6 形小鏡 5Y105.6 形小鏡	中・中	25	1.1	1.8 土溝	1.8 土溝	25	1.1	1.8 土溝	1.8 土溝	相形透孔	K314
60	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	3 b 類	5Y105.6 形小鏡 5Y105.6 形小鏡	中・中	20.8	1.6	0.9	1.8	20.8	1.6	0.9	1.8	方形透孔	K281
61	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	4 b 類	5Y105.6 形小鏡 5Y105.6 形小鏡	中・少	1.4	0.7	1.8	1.8	20.9	1.6	0.9	1.8	方形透孔	K315
62	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	2 b 類	5Y105.6 形小鏡 5Y105.6 形小鏡	中・中	28.9	2.2	0.8	1.8	28.9	2.2	0.8	1.8	方形透孔	K258
63	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	3 a 類	5Y105.6 形小鏡 5Y105.6 形小鏡	中・中	26.3	1.9	1.2	1.8	26.3	1.9	1.2	1.8	方形透孔	K275
64	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	2 a 類	5Y106.4 に 近い 5Y106.4 に 近い	中・中	27	1.6	1.8	1.8	27	1.6	1.8	方形透孔	K256	
65	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	2 a 類	5Y105.6 形小鏡 5Y105.6 形小鏡	中・中	20.0	1.8	1.2	2.8	20.0	1.8	1.2	2.8	方形透孔	K258
66	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	2 a 類	5Y105.6 形小鏡 5Y105.6 形小鏡	中・中	21.2	1.3	1.3	1.8 土溝	21.2	1.3	1.3	1.8 土溝	方形透孔	K305
67	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	2 c 類	5Y105.6 形小鏡 5Y105.6 形小鏡	中・少	25.4	1.4	0.6	1.8	25.4	1.4	0.6	1.8	方形透孔	K284
68	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	2 b 類	5Y106.4 に 近い 5Y106.4 に 近い	中・中	27.0	1.1	0.5	1.8	27.0	1.1	0.5	1.8	方形透孔	K286
69	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	3 a 類	5Y105.6 形小鏡 5Y105.6 形小鏡	中・中	21	1.3	1.8	1.8	21	1.3	1.8	方形透孔	K256	
70	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	3 a 類	5Y106.6 形小鏡 5Y106.6 形小鏡	中・中	27.6	2.5	1.0	1.8 土溝	27.6	2.5	1.0	1.8 土溝	方形透孔	K279
71	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	2 c 類	5Y106.6 形小鏡 5Y106.6 形小鏡	中・中	26.9	1.6	0.5	1.8	26.9	1.6	0.5	1.8	方形透孔	K249
72	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	3 a 類	5Y105.6 形小鏡 5Y105.6 形小鏡	中・中	29.0	1.5	1.1	1.8	29.0	1.5	1.1	1.8	方形透孔	K284
73	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	3 a 類	5Y105.6 形小鏡 5Y105.6 形小鏡	中・中	27.9	2.2	1.4	1.8	27.9	2.2	1.4	1.8	方形透孔	K277
74	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	2 b 類	5Y105.6 形小鏡 5Y105.6 形小鏡	中・中	30.6	2.2	0.9	1.8	30.6	2.2	0.9	1.8	相形透孔	K275
75	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	2 c 類	5Y106.6 形小鏡 5Y106.6 形小鏡	中・少	28.4	3.1	0.8	1.8	28.4	3.1	0.8	1.8	相形透孔	K279
76	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	2 a 類	5Y105.6 形小鏡 5Y105.6 形小鏡	中・中	28.4	1.6	1.3	1.8	28.4	1.6	1.3	1.8	相形透孔	K279
77	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	2 a 類	5Y106.6 形小鏡 5Y106.6 形小鏡	中・中	28.4	1.6	1.3	1.8	28.4	1.6	1.3	1.8	相形透孔	K279
78	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	2 a 類	5Y106.6 形小鏡 5Y106.6 形小鏡	中・中	28.4	1.6	1.3	1.8	28.4	1.6	1.3	1.8	相形透孔	K277
79	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	2 a 類	5Y106.6 形小鏡 5Y106.6 形小鏡	中・中	28.4	1.6	1.3	1.8	28.4	1.6	1.3	1.8	相形透孔	K277
80	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	2 a 類	5Y106.6 形小鏡 5Y106.6 形小鏡	中・中	29.1	2.4	1.1	1.8	29.1	2.4	1.1	1.8	相形透孔	K275
81	今谷古墳	円墳	銅鏡	フタハナ ク・メヌマ	銀ナメハハ ク・メヌマ	2 a 類	5Y106.6 形小鏡 5Y106.6 形小鏡	中・中	29.1	2.4	1.1	1.8	29.1	2.4	1.1	1.8	相形透孔	K275

第23表 円筒埴輪観察表3



標文番号	古墳名	出土位置	器種	部位	材質	調査		口縁部形状	発掘方法	色澤		石質・石長	敷土		寸法			備考	標品番号	
						外周	内周			外周	内周		口径	口径	高さ	幅	重量			形状
100	今福古墳	第3基・西側 円形土壇	円筒	底部	フチハケテマシ ヤチハケテマシ ヤチハケテマシ	フチハケテマシ ヤチハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		原簿・埋蔵品 目録・附録目録	K277
110	今福古墳	第3基・西側 円形土壇	円筒	底部	フチハケテマシ ヤチハケテマシ	フチハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K286
111	今福古墳		円筒	底部	フチハケテマシ ヤチハケテマシ	フチハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K286
112	今福古墳		円筒	底部	フチハケテマシ ヤチハケテマシ	フチハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K277
113	今福古墳		円筒	底部	フチハケテマシ ヤチハケテマシ	フチハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K277
114	今福古墳		円筒	底部	フチハケテマシ ヤチハケテマシ	フチハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K277
115	今福古墳		円筒	底部	フチハケテマシ ヤチハケテマシ	フチハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K281
116	今福古墳		円筒	底部	フチハケテマシ ヤチハケテマシ	フチハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K281
117	今福古墳		円筒	底部	フチハケテマシ ヤチハケテマシ	フチハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K281
118	今福古墳		円筒	底部	フチハケテマシ ヤチハケテマシ	フチハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K277
119	今福古墳	南西側	円筒	底部	フチハケテマシ ヤチハケテマシ	フチハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K277
120	今福古墳		円筒	底部	フチハケテマシ ヤチハケテマシ	フチハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K275
121	今福古墳		円筒	底部	フチハケテマシ ヤチハケテマシ	フチハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K284
122	今福古墳		円筒	底部	フチハケテマシ ヤチハケテマシ	フチハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K284
123	今福古墳		円筒	底部	フチハケテマシ ヤチハケテマシ	フチハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K281
134	今福古墳		円筒	底部	フチハケテマシ ヤチハケテマシ	フチハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K277
135	今福古墳		円筒	底部	フチハケテマシ ヤチハケテマシ	フチハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K277
126	今福古墳		円筒	底部	フチハケテマシ ヤチハケテマシ	フチハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K277
127	今福古墳		円筒	底部	フチハケテマシ ヤチハケテマシ	フチハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K277
128	今福古墳		円筒	底部	フチハケテマシ ヤチハケテマシ	フチハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K277
129	今福古墳	後円部東側 朝顔?	朝顔	口縁部	ハケテマシ ヤチハケテマシ	ハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K285
130	今福古墳		朝顔	口縁部	ハケテマシ ヤチハケテマシ	ハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K277
131	今福古墳		朝顔	口縁部	ハケテマシ ヤチハケテマシ	ハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K286
132	今福古墳		朝顔	口縁部	ハケテマシ ヤチハケテマシ	ハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K286
133	今福古墳		朝顔	口縁部	ハケテマシ ヤチハケテマシ	ハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K277
134	今福古墳		朝顔	口縁部	ハケテマシ ヤチハケテマシ	ハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K277
135	今福古墳		朝顔	底部	フチハケテマシ ヤチハケテマシ	フチハケテマシ ヤチハケテマシ						中・並					1.8		埋蔵品目録	K276

第25表 円筒埴輪観察表5・朝顔形埴輪観察表1

順次番号	古墳名	出土位置	部位	調査		土質	発掘状況	色澤			紋土			寸法				保存状況	備考	製品番号
				外周	内周			外周	内周	石室・石段	角石	扉石	扉石	扉石	扉石	扉石	扉石			
136	今岡古墳	朝顔	扉石	黒色・赤褐色 黒色・黒褐色	黒色・赤褐色 黒色・黒褐色	赤褐色	25V74 残片	25V74 残片	25V74 残片	中・少	中・少	1.8	1.8	1.8	1.8	K272				
137	今岡古墳	朝顔	扉石	マダマ	マダマ	マダマ	2 a 類	75YR6.5 類	75YR6.5 類	中・中	中・中	1.8	1.5	1.8	K249					
222	ミヅノ山古墳	内周	扉石	赤・赤褐色 赤・赤褐色	赤・赤褐色 赤・赤褐色	赤褐色	75YR5.5 類	75YR6.5 類	75YR6.5 類	中・少	中・少	2.4	1.8	1.5						
223	赤山古墳	内周	扉石	赤褐色	赤褐色	赤褐色	10YR6.5 類	10YR6.5 類	10YR6.5 類	中・少	中・少	3.6	2.6	1.1	1.8					
224	碧山4号墳	表扉	扉石	赤褐色	赤褐色	赤褐色	25Y7.3 類	25Y7.3 類	25Y7.3 類	中・少	中・少	3.6	2.3	1.3	1.8					
225	不明	表扉	扉石	赤褐色	赤褐色	赤褐色	75YR4.4 類	75YR4.4 類	75YR4.4 類	中・少	中・少	3.6	2.3	1.3	1.8					
226	3号墳	表扉	扉石	赤褐色	赤褐色	赤褐色	10YR7.0 類	10YR7.0 類	10YR7.0 類	中・少	中・少				1.8					
227	津原家古墳	表扉	扉石	赤褐色	赤褐色	赤褐色	10YR7.0 類	10YR7.0 類	10YR7.0 類	中・少	中・少				1.8					

第26表 円筒埴輪観察表6・朝顔形埴輪観察表2

順次番号	古墳名	出土位置	種類	器種	状態	形状	外周	内周	色澤	紋土	石室・石段	角石	扉石	扉石	扉石	寸法				保存状況	備考	製品番号
																直径	高さ	直径	高さ			
138	今岡古墳	朝顔	埴輪	赤褐色	破損	円筒形	25YR5.2 赤褐色	25YR5.6 赤褐色	25YR5.2 赤褐色	中・中	中・中	1.6	1.6	1.6	1.6	10281						
139	今岡古墳	朝顔	埴輪	赤褐色	破損	円筒形	25YR5.8 赤褐色	25YR5.8 赤褐色	25YR5.8 赤褐色	中・中	中・中	1.6	1.6	1.6	1.6	10281						
140	今岡古墳	朝顔	埴輪	赤褐色	破損	円筒形	25YR5.8 赤褐色	25YR5.8 赤褐色	25YR5.8 赤褐色	中・中	中・中	1.4	1.4	1.4	1.4	10281						
141	今岡古墳	朝顔	埴輪	赤褐色	破損	円筒形	25YR5.4 赤褐色	25YR5.4 赤褐色	25YR5.4 赤褐色	中・中	中・中	1.5	1.5	1.5	1.5	K244						
142	今岡古墳	朝顔	埴輪	赤褐色	破損	円筒形	25YR6.8 赤褐色	25YR6.8 赤褐色	25YR6.8 赤褐色	中・中	中・中	1.7	1.7	1.7	1.7	13661						
143	今岡古墳	朝顔	埴輪	赤褐色	破損	円筒形	25YR5.8 赤褐色	25YR5.8 赤褐色	25YR5.8 赤褐色	中・中	中・中	1.5	1.5	1.5	1.5	467-11						
144	今岡古墳	朝顔	埴輪	赤褐色	破損	円筒形	25YR5.8 赤褐色	25YR5.8 赤褐色	25YR5.8 赤褐色	中・中	中・中	1.4	1.4	1.4	1.4	10281						
145	今岡古墳	朝顔	埴輪	赤褐色	破損	円筒形	25YR5.8 赤褐色	25YR5.8 赤褐色	25YR5.8 赤褐色	中・中	中・中	1.3	1.3	1.3	1.3	10281						
146	今岡古墳	朝顔	埴輪	赤褐色	破損	円筒形	5Y5.1 黒	25YR4.8 赤褐色	25YR4.8 赤褐色	中・中	中・中	1.4	1.4	1.4	1.4	10281						
147	今岡古墳	朝顔	埴輪	赤褐色	破損	円筒形	5YR6.8 赤褐色	5YR6.8 赤褐色	5YR6.8 赤褐色	中・中	中・中	1.2	1.2	1.2	1.2	10281						
148	今岡古墳	朝顔	埴輪	赤褐色	破損	円筒形	25YR6.6 赤褐色	25YR6.6 赤褐色	25YR6.6 赤褐色	中・中	中・中	1.8	1.8	1.8	1.8	10281						
149	今岡古墳	朝顔	埴輪	赤褐色	破損	円筒形	25Y5.1 黒	5YR5.8 赤褐色	5YR5.8 赤褐色	中・中	中・中	1.6	1.6	1.6	1.6	10281						
150	今岡古墳	朝顔	埴輪	赤褐色	破損	円筒形	25YR6.8 赤褐色	25YR6.8 赤褐色	25YR6.8 赤褐色	中・中	中・中	1.3	1.3	1.3	1.3	10281						
151	今岡古墳	朝顔	埴輪	赤褐色	破損	円筒形	25YR6.8 赤褐色	25YR6.8 赤褐色	25YR6.8 赤褐色	中・中	中・中	1.2	1.2	1.2	1.2	10281						
152	今岡古墳	朝顔	埴輪	赤褐色	破損	円筒形	25YR6.5 赤褐色	25YR6.5 赤褐色	25YR6.5 赤褐色	中・中	中・中	1.3	1.3	1.3	1.3	47-11						
153	今岡古墳	朝顔	埴輪	赤褐色	破損	円筒形	5YR5.8 赤褐色	5YR5.8 赤褐色	5YR5.8 赤褐色	中・中	中・中	1.2	1.2	1.2	1.2	K285						
154	今岡古墳	朝顔	埴輪	赤褐色	破損	円筒形	5YR5.8 赤褐色	5YR5.8 赤褐色	5YR5.8 赤褐色	中・中	中・中	1.9	1.9	1.9	1.9	K285						

第27表 形象埴輪観察表1







香川県埋蔵文化財センター年報

平成 27 年度

平成 29 年 2 月 28 日 発行

編集・発行 香川県埋蔵文化財センター

〒 762-0024

香川県坂出市府中町南谷 5001 番地 4

電 話 (0877) 48-2191

FAX (0877) 48-3249

印 刷 ワールド印刷株式会社